

令和元年度

温かい手

● 愛の輪ポスター ● 障害者週間のポスター ● 福祉体験作文 ● 心の輪を広げる体験作文



 ふれあいのまち KOBE ・ 愛の輪運動推進委員会

 神戸市

 社会福祉法人 神戸市社会福祉協議会

福祉の心を育む市民運動

ふれあいのまち KOBE・愛の輪運動

愛の輪運動とは…

ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂：だれもが潜在能力を発揮できる役割を持ってつながり合う地域社会づくり）の理念に基づき、人と人とのふれあいの中で「思いやり」「譲り合い」「助け合い」等の福祉の心を育み、身近なところから福祉の実践につなげ、「ともに生きる」地域社会づくりを目指した神戸の市民運動です。

平成2年10月に発足した愛の輪運動には、地域の自治会や婦人会、民生委員児童委員協議会、行政、福祉、教育、医療、ボランティア、企業、労働組合など、運動に賛同する様々な団体が会員として参加し、それぞれの立場から運動を進めています。

愛の輪運動の取り組み

●福祉教育の促進



【中・高生の福祉体験学習（ワークキャンプ）】

市内の中・高生を対象に夏休み中に、自ら進んで福祉施設での体験学習をすることにより、福祉の心を培う取り組みを行っています。

●啓発活動の推進



【愛の輪ポスターの募集】

市内の小・中・高校生を対象に「福祉の心」をテーマにした作品を募集し、啓発活動を推進しています。

●障がいへの理解推進



【障がいサポーター養成講座】

共に生きる社会を目指して、様々な障がいに関する正しい知識の取得と理解を深める取り組みを行っています。

●ボランティア活動の推進



お住まいの地域をはじめ高齢者や障がい者に対するボランティア活動への参加を促進しています。

目 次



令和元年度 愛の輪ポスター 入賞作品	3
令和元年度 障害者週間のポスター 入賞作品	8
福祉体験学習（ワークキャンプ）活動の様子	9
福祉体験学習（ワークキャンプ）参加状況	11
福祉体験作文	12
心の輪を広げる体験作文	34



令和元年度 愛の輪ポスター入賞者

応募作品数		
	愛の輪 ポスター	障害者週間の ポスター
小学生	302点	(74点)
中学生	172点	(28点)
高校生	33点	
支援学校	25点	(23点)
合計	532点	(125点)

最優秀賞

【小学生の部】

神戸市立上筒井小学校 4年 河原 有 咲

【中学生の部】

神戸市立本庄中学校 3年 酒井 美 優

【高校生の部】

兵庫県立兵庫工業高等学校 2年 吹田 真 波

優 秀 賞

【小学生の部】

神戸市立横尾小学校 4年 山 口 玲 奈

神戸市立榎野台小学校 6年 谷 口 優 奈

【中学生の部】

神戸市立義務教育学校港島学園 8年 山 卯 麻 央

神戸市立太山寺中学校 3年 田 中 千咲子

【高校生の部】

兵庫県立兵庫工業高等学校 2年 柴 野 花 音

兵庫県立兵庫工業高等学校 2年 水 谷 心

佳 作

【小学生の部】

神戸市立長田小学校 1年 飯 田 蒼 史

神戸市立糀台小学校 1年 平 山 あんず

神戸市立東町小学校 4年 田 中 柑 那

神戸市立井吹の丘小学校 5年 吉 野 一 輝

神戸市立岩岡小学校 5年 木 下 滯

神戸市立岩岡小学校 5年 木 下 叶 夢

【中学生の部】

神戸市立住吉中学校 2年 飯 田 翔 音

神戸市立住吉中学校 2年 山 手 春 奈

神戸市立太山寺中学校 2年 吉 岡 奈々実

神戸市立太山寺中学校 3年 寺 本 莉 子

神戸市立太山寺中学校 3年 浦 上 凜 香

【高校生の部】

神戸市立須磨翔風高等学校 1年 宇 野 浩 輝

兵庫県立兵庫工業高等学校 2年 大 野 栞

兵庫県立兵庫工業高等学校 2年 酒 井 李 恵

神戸市立いぶき明生支援学校 A部門 中学部 2年 杉 本 隆 彰



令和元年度 障害者週間のポスター入賞者

小学生の部

神戸市立向洋小学校 6年 中 村 美 琴

中学生の部

神戸市立大池中学校 2年 菅 野 智 絢

令和
元年度

愛の輪ポスター 入賞作品

最優秀賞



吹田 真波

兵庫県立兵庫工業高等学校 2年



河原 有咲

神戸市立上筒井小学校 4年



酒井 美優

神戸市立本庄中学校 3年

優秀賞



谷口優奈

神戸市立榎野台小学校 6年



山口玲奈

神戸市立横尾小学校 4年



山卯麻央

神戸市立義務教育学校港島学園 8年



田中千咲子

神戸市立太山寺中学校 3年



柴野花音

兵庫県立兵庫工業高等学校 2年



水谷心

兵庫県立兵庫工業高等学校 2年

佳作



飯田 蒼史

神戸市立長田小学校 1年



平山 あんず

神戸市立糺台小学校 1年



木下 漣

神戸市立岩岡小学校 5年



吉野 一輝

神戸市立井吹の丘小学校 5年



田中 柑那

神戸市立東町小学校 4年

佳作



寺本 莉子

神戸市立太山寺中学校 3年



山手 春奈

神戸市立住吉中学校 2年



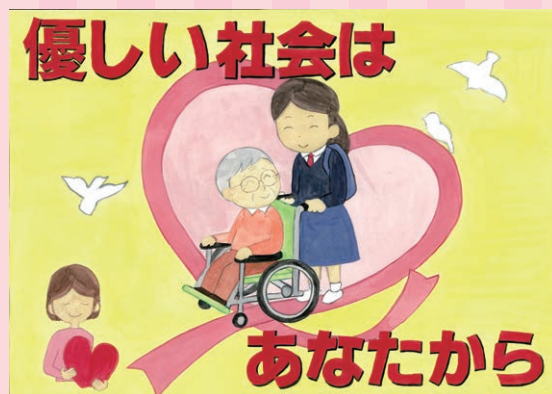
木下 叶夢

神戸市立岩岡小学校 5年



飯田 翔音

神戸市立住吉中学校 2年



吉岡 奈々実

神戸市立太山寺中学校 2年

佳作



酒井 李 恵

兵庫県立兵庫工業高等学校 2年



大 野 栞

兵庫県立兵庫工業高等学校 2年



浦 上 凜 香

神戸市立太山寺中学校 3年



杉 本 隆 彰

神戸市立いぶき明生支援学校
A部門 中学部 2年



宇 野 浩 輝

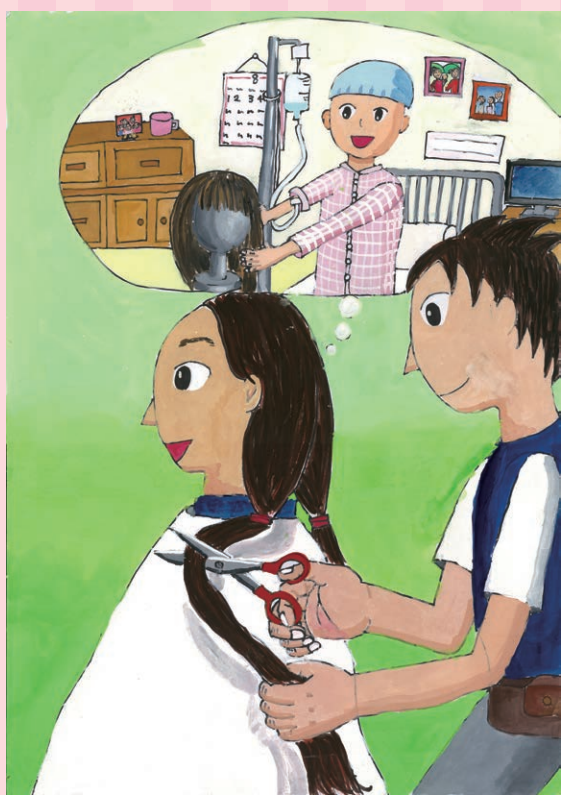
神戸市立須磨翔風高等学校 1年

令和
元年度

障害者週間のポスター

入賞作品

小学生の部



中村美琴

神戸市立向洋小学校 6年

中学生の部



菅野智絢

神戸市立大池中学校 2年

福祉体験学習(ワークキャンプ)活動の様子

ワークキャンプとは…

市内在学の中・高校生が夏休み中に保育・児童・高齢・障がい者の福祉施設で福祉体験を行い、活動を通して、人とのつながりや社会生活の大切さを経験し、「共に生き」「共に学び」「共に育つ」ことへの理解と行動力を培います。

令和元年度実施日

1期：7月24日(水)・25日(木)・26日(金)
2期：7月30日(火)・31日(水)・8月1日(木)
3期：8月5日(月)・6日(火)・7日(水)
5日間コース：8月19日(月)～23日(金)

保育所(園)・こども園



とても充実した時間をすごさせていただきました



パズルをとおして、小さい子供と仲良くなりました



子どもたちはとても元気で、パワーをもらいました。私の人生の中で貴重な体験になりました



プールでプカプカ浮く練習。気持ちいいね！



みんながすぐになついてくれて、うれしかったし、楽しかったです。



ワークキャンプに参加して、さらに子どもが大好きになりました!!

児童館・学童保育



子どもたちと元気いっぱい遊べて楽しかったし、とてもいい経験になりました



とてもいい経験ができました



寝め上手！

障がい者福祉施設



誰にでも笑える場所がある



貴重な体験をすることができ、とても良い思い出になりました



利用者の方と交流させていただいて、思いやりの大切さを学び、かけがえない貴重な体験になりました



色んな人の笑顔とふれあえて、自分まで自然と笑顔になれた三日間でした



普段ほとんど関わることのできない方々と一緒に作業させていただくことができ、とても良い経験になりました



初めて見た点字タイプにとても驚き、感動しました。

高齢者福祉施設



職員の方や入居の方たちがやさしく接して下さり、とても過ごしやすく勉強になった日々でした



私の夢に一步近づくことができました



この3日間たくさん貴重な体験ができました



正解なんてないんだよ。利用者様と過ごす塗り絵の時間

令和元年度 福祉体験学習（ワークキャンプ）参加状況

1. 福祉体験学習参加人数（参加 130 校）

	1 年		2 年		3 年		4 年		合 計		総 計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男女計
中学校	51	215	26	203	25	204			102	622	724
高等学校	23	284	55	297	29	193			107	774	881
											1,605

2. 福祉体験学習参加人数と受け入れ社会福祉施設数の移り変わり

	中学生	高校生	合 計	受入施設数			中学生	高校生	合 計	受入施設数		
平成元年度	27	10	37	16	ワークキャンプが 始まる1期制	↓	平成 17 年度	688	667	1,355	326	3期制
2 年度	121	62	183	30			18 年度	611	627	1,238	313	
3 年度	332	117	449	118			19 年度	532	496	1,028	298	
4 年度	635	275	910	180			20 年度	533	445	978	286	
5 年度	1,408	442	1,850	275	2期制	↓	21 年度	490	466	956	312	
6 年度	1,326	505	1,831	302			22 年度	627	582	1,209	303	
7 年度	1,726	685	2,411	269	3期制	↓	23 年度	799	526	1,325	319	
8 年度	1,856	715	2,571	314			24 年度	873	662	1,535	328	
9 年度	2,302	1,031	3,333	326	4期制	↓	25 年度	884	609	1,493	367	
10 年度	2,298	1,177	3,475	372			26 年度	973	719	1,692	329	
11 年度	1,389	1,177	2,566	376	2期制	↓	27 年度	1,091	879	1,970	360	
12 年度	1,463	1,118	2,581	397			28 年度	856	697	1,553	409	
13 年度	1,305	1,035	2,340	431			29 年度	824	836	1,660	394	
14 年度	1,531	1,309	2,840	402			30 年度	812	911	1,723	414	
15 年度	1,054	978	2,032	371			令和元年度	724	881	1,605	389	
16 年度	794	944	1,738	334								

3. 福祉体験学習の実施日程とお世話になった社会福祉施設数と参加人数

	日 程	お世話になった施設数	参 加 人 数
1 期	7月24、25、26日	283	595
2 期	7月30、31日、8月1日	293	591
3 期	8月5、6、7日	230	419
合 計		(延べ数)	1,605

4. 福祉体験学習施設別の参加人数

1. 保育所（園）・認定こども園	1,128	9. 障がい者地域活動支援センター	0
2. 児童館	181	10. 高齢者デイサービスセンター	105
3. 地域学童保育所・学童保育コーナー	31	11. 特別養護老人ホーム	46
4. 児童発達支援センター	0	12. 養護老人ホーム	10
5. 障がい者入所施設	4	13. 介護老人保健施設	37
6. 障がい者多機能型支援事業所	28	14. 有料老人ホーム	4
7. 障がい者生活介護事業所	14	15. 高齢者ショートステイ	2
8. 障がい者就労継続支援事業所	11	16. 小規模多機能型居宅介護施設	4
		合 計	1,605

5. 5日間コース参加人数

	1 年		2 年		3 年		合 計		総 計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男女計
中学校	5	24	3	17	1	4	9	45	54
高等学校	0	9	0	6	0	0	0	15	15
									69

※振り返りワークショップ参加者 14 名（中学生 13 人、高校生 1 人）

福祉体験作文

応募作品数

中学生の部	189 点
高校生の部	475 点
合 計	664 点

最優秀賞

【中学生の部】

保育園の先生から学んだこと

神戸市立広陵中学校

3年 向山 茉那………… 13

【高校生の部】

利用者思いの環境づくり

神戸市立葺合高等学校

1年 西村 美咲………… 14

優秀賞

【中学生の部】

命を守り育てる仕事
「できる」を尊重すること神戸市立歌敷山中学校
神戸海星女子学院中学校2年 大東 廉………… 15
3年 関口さくら………… 16

【高校生の部】

キラキラ言葉
最後のワークキャンプを終えて神戸市立須磨翔風高等学校
兵庫県立神戸甲北高等学校3年 松村 美果………… 17
3年 横山 天来………… 18

優良賞

【中学生の部】

ワークキャンプを終えて
ワークキャンプで得たもの
体験を通して神戸市立伊川谷中学校
神戸市立北神戸中学校
松 蔭 中 学 校2年 秋定 葉月………… 19
3年 才木 理………… 20
3年 榊見 日奈………… 21

【高校生の部】

「ありがとう」言葉の力
ワークキャンプを終えて
「素直に伝える」大切さ兵庫県立長田高等学校
神戸常盤女子高等学校
神戸野田高等学校1年 北川 真衣………… 22
3年 八井 杏莉………… 23
3年 原 希実………… 24

佳作

【中学生の部】

学んだことをいかして
初めてのワークキャンプ
あなたが話しかけてくれたから
ワークキャンプで学んだ事神戸市立原田中学校
神戸市立横尾中学校
神戸市立桜が丘中学校
神戸海星女子学院中学校1年 山本 万帆………… 25
2年 藤本 紗綾………… 26
3年 藤井 咲蘭………… 27
3年 熊谷 結祈………… 28

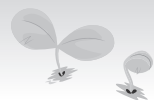
【高校生の部】

ワークキャンプを終えて
寄り添う
潤いの場所
再会と感動神戸常盤女子高等学校
須磨学園高等学校
神戸野田高等学校
神戸市立須磨翔風高等学校1年 松下 夢純………… 29
1年 古関 愛祐………… 30
2年 村上 夢来………… 31
3年 松下 奈澄………… 32

最優秀賞作品

中学生の部

保育園の先生から学んだこと



神戸市立広陵中学校

3年 向山 茉那

私は小さい子どもとふれ合うことが好きです。キラキラした目で笑ってくれたり、私に何か伝えようと一生懸命に話してくれたり、そんな様子を見ていると自然と心温まります。だからワークキャンプに参加しました。

もう1つ理由があります。それは、小学校の先生になりたいという夢があるからです。小学6年生のときに出会った、パワフルでユーモアのある、素敵な先生がいつも私に勇気を与えてくれました。私にはその先生が輝いて見え、「私も先生みたいになりたい。」と憧れたのがきっかけでした。だから、ワークキャンプはそんな私が成長するのにぴったりの場所でした。

実は、ワークキャンプに参加するのはこれで3回目なのですが、何回参加しても新しい発見ばかりで飽きることがありません。例えば、保育園のおもちゃです。どれも手作りのものや木製のものが多くありました。そこで現場で働いている保育士さんにおもちゃを作るときや選ぶときに気を付けているポイントを聞いてみました。1つ目のポイントは、カラフルなものです。色彩が鮮やかなものは子どもたちの興味をひきます。また、創造力を発達させるのに効果的だそうです。

2つ目は、角や尖っている部分が少ないものです。特に1歳児クラスでは多く見られ、チューブなどの柔らかいおもちゃもありました。これは、遊んでいる子や他の子に怪我をさせないために、一番大切なポイントだと思います。

また、おもちゃだけでなく、グラウンドで遊ぶときは、ベランダや砂場のへりにクッション材が置かれていたり、遊具やベンチも全て木製だったりしました。

他にも、細かいところまで気を配っていて、子どもたちがたくさん楽しめるように、また保護者の方が子どもたちを安心して預けられるように、工夫されていて関心しました。

逆に慣れないことも多かったです。子どもたちがケンカを始めたときは一番焦りました。1歳児クラスはまだ話せないため、自分の感情が表せず泣き出してしまいました。3から5歳クラスでは、おもちゃを投げ出してしまったり、相手の子に暴力をふるいそうになってしまったりしました。

そのとき、保育士の方がずっと間に入ってくれました。そして、「ケンカを止めたいときは、怒らず、焦らず、落ちついて丁寧に接してあげるといいよ。」と教えてくださいました。なるほど、確かにそうです。私が落ちつかなければ、敏感な子どもたちに伝わってしまい、子どもたちも落ちつかません。私は「さすがだなあ。」と思いました。

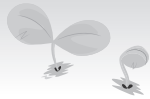
最後に保育士の方に「この仕事の好きなところは何かですか。」と聞いてみました。すると、笑顔で「子どもの笑っている顔が見られること。子どもたちがケンカしたり、泣き出したりしたときは、嫌だなあ、って思うこともあるけど、その後は必ず笑って遊んでいるところがかわいくって好きです。辛いことも多いけど、その分子どもたちも返してくれるから。」と答えてくださいました。そのときの先生は本当に嬉しそうでした。

保育園では、先生方が子どもたちのために必死に頑張っていました。私が保育園に通っていたときも先生がこんなに私のために支えてくれていたのだと思うと、感謝の気持ちで一杯です。次は、私が先生となってたくさんの子どもたちと出会って、たくさんの子どもたちを笑顔にさせたいです。

最優秀賞作品

高校生の部

利用者思いの環境づくり



神戸市立葺合高等学校

1年 西村 美咲

私は、朝の満員のバスに乗り込みました。車内は学生や仕事に向かう人の暑苦しさが充満していました。昨年同様、私はある高齢者福祉施設に向かっていました。ワークキャンプに参加するためです。昨年は1日に約20人から30人が利用する大きい施設だったのに比べ、今回お世話になった施設は、1日の利用人数が5人から10人ほどのアットホームな空間が広がっている施設でした。今回のワークキャンプでは、お世話になったこの2つの施設の工夫に着目しました。

大きく環境の違う2つの施設の中でも、たくさんの共通点を見つけることができました。1つ目は、利用者さんが到着したら体温と血圧を測定し記録することです。普段より血圧が低ければ「今日の体操をいつも以上に頑張ろうね」と声を掛けます。普段から体温や血圧を記録しておく、体調不良にいち早く気づいたり、食事や水分量を調整する指標になったりします。また、到着してすぐに熱いお茶も出されます。高齢者は熱いお茶が大好きです。従業員の方は、利用者さんがやけどしないよう「熱いお茶、ここに置いておきますね。」と必ず一声かけていました。高齢者の方はのどが渇いていることに気づきにくく、こちらから提供しないと脱水の原因になるそうです。2つ目は、体操で体と脳をたくさん動かすことです。朝はラジオ体操、食事の前は口腔体操、レクリエーションとして脳と体を同時に動かす体操などが行われます。口腔体操とは、食べ物を飲み込む力と食べ物が詰まった時に吐き出す力を鍛える、口と喉の体操です。また、脳と体を同時に使う体操は、私が挑戦しても難しいレベルの脳トレで、脳の老化防止につながります。年を取ると弱ってくる力を

楽しく鍛える体操は、どちらの施設でも必ず行われていました。3つ目は、施設の設備がすべてバリアフリーになっていたことです。段差がないということは誰もが想像できることですが、これだけではありません。施設内のすべてのドアがスライドドアか自動ドアになっています。高齢者にとって、手前や奥に開くドアに比べて、身体をそれほど動かすことなく開くことができます。これもバリアフリーのひとつです。4つ目は、トイレに鍵をかけないことです。こうすることで、下着の脱ぎ着を施設の方がサポートできたり、緊急時に従業員がすぐに入ることができたりします。最後の5つ目は、カラオケの機械が置いてあったことです。歌を歌ったり、体操の見本の映像を流したりするのに使います。

これまで2つの高齢者福祉施設にお世話になって共通点をたくさん見つけることができました。これらのたくさんの工夫は利用者さんのことを一番考えた素晴らしいものです。それに比べ、従業員専用のスペースはとても狭く、どれだけ従業員が利用者さんのことを思って作った環境なのかを感じることができました。ただ、汗を流しながら笑顔で頑張っている従業員のための環境ももう少し整えてあげたらいいのと思いました。

共通点ばかりではありません。前回の広々とした空間だからこそその工夫と、今回のアットホームな空間だからこそその工夫も見られました。前回の施設は1日に何十人の方が利用するので、トレーニングのための機械がたくさん並んでいて自由に使えたり、お風呂場には車いすの方がそのまま利用できる設備が整っていたりしました。一方で今回の施設は、1日に多くて10人ほどなので、みんなで一緒に餃子を作ったり、ミニゲーム大会を行ったりできました。また、雰囲気もゆったりしていて、施設の方の目が常に一对一、もしくは一対二で向けられていました。

どちらの施設も、この施設だからできることというオリジナリティもあり、毎日楽しめる環境が

整っていました。

ここで今回私が取り組んだことは、利用者さんとたくさん会話をすることや体操などを一緒にするだけでした。介護をするための資格をもっていないので、歩く時に体を支えること、利用者さんを椅子に座らせることさえもできませんでした。一方、従業員の方は、利用者さんのちょっとわがままなお願いにも笑顔で必死に応えていました。汗だくになりながら働いている従業員の負担を減らす方法はないのか、従業員専用スペースをもっと快適な場所にするべきではないのかと思いました。

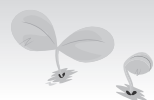
今回のワークキャンプの活動を通して、どれだけ高齢者福祉施設の方が利用者さんのことを第一に考えて環境整備をしているか、その施設ならではの工夫がされているかを体感しました。

活動が終わり、帰りのバスに乗る時、何げなく足元を見ました。このバスもたくさんの高齢者が利用しているのだな…とふと思いました。

優秀賞作品

中学生の部

命を守り育てる仕事



神戸市立歌敷山中学校

2年 大東 廉

「お兄ちゃん、まだいてくれたんや！よかった！」

最終日に、園児が僕のところに走り寄って来て言ってくれた言葉でした。この言葉がいつまでも僕の心の中で響きわたりました。ただ嬉しいだけではない、この気持ちはいったいなんだろうかと不思議に思いました。

今年の5月、痛ましいニュースを聞き、衝撃を受けました。それは、保育園の園児たちが、お散歩の途中、信号待ちで交通事故に巻き込まれてしまった事です。園の先生方は、万全の注意を払い、命がけで対応していたのにも関わらず、尊い命が失われました。園の先生方にとってなんと無念だったことでしょう。僕は、この事故をきっかけに、

保育園で仕事をされている方々が、日々安全面でのようなことを配慮されているのかを学びたいと思いました。そこで、この夏休みに僕は、神戸市社会福祉協議会主催の福祉体験学習(ワークキャンプ)で児童福祉施設に行くことを希望しました。

初日は、たくさんの園児を目の前にして戸惑うこともありましたが、元気いっぱい園児たちがいろいろなことを話しかけてきてくれて、すぐに打ち解けることができました。園児たちの瞳はキラキラと輝いていました。

園児たちが大好きなプールの時間になりました。園の先生方は、少しでも園児がふざけていたり、別の行動をしだしていると、すぐに見つけて注意をしていました。水はとても危なく、少しでも油断すると命を落とすことがあります。プールは楽しいですが、いつも危険と隣り合わせです。先生方は、3人でチームを組んで園児たちに対応していました。園児全体に声をかける先生、個々に声をかけながら遊ぶ先生、あえてプールに入らずに写真を撮りながら、全体的な安全を見渡している先生。そのような中でも、先生方の園児にかける言葉は、とても温かいものでした。例えば、「前よりずっと泳げるようになったね!」「あともう少し!頑張れ!」という言葉にひかれました。園児一人一人の個性も泳力も心得ている先生方の指導で、水が苦手な園児も一生懸命チャレンジしていました。先生方の連携で園児たちは楽しく安全にプールの時間を過ごすことができました。

給食の時間では、夏の暑い時期だったので、園の方々は、食中毒にも細心の注意を払っていました。食中毒警報などを何度も確認し、食事について共通理解していました。

最終日には、ワークキャンプに参加した僕たちのためにお別れ会を開いてくれました。園児たちがみんな「歌えバンバン」を歌ってくれました。いつも園で歌っている声より大きな声で歌ってくれたその歌声を聴いていると、園での活動がよみがえりました。プールで一緒に遊んでいっぱい水

をかけられたこと、お昼寝の時間に園児のために先生と作業をしたこと、楽しくおしゃべりしながら給食を食べたこと、遊ぶ時間にはいつも5人くらいの園児が僕にぶら下がってきたこと…。3日間のいろいろなことが思い出され、毎日とても体力が必要でしたが、園児たちの歌声でその疲れも吹っ飛びました。

園での仕事は、大変ハードで安全面も配慮しなければならなくて神経のいる仕事ですが、園児と過ごす時間は、とても充実していて達成感がありました。

「お兄ちゃん、まだいてくれたんや！よかった！」

あの時の不思議な気持ちは、自分が必要とされているという喜びでした。命を守り、育てる。責任あるこの仕事の魅力を感じることができました。

このような貴重な体験の機会を与えてくださった、児童福祉施設と神戸市社会福祉協議会の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

優秀賞作品

中学生の部

「できる」を尊重すること



神戸海星女子学院中学校

3年 関口さくら

私は小さい子どもが大好きだ。笑顔で笑いかけられたりすると、その度にその可愛さに癒される。だから私は、認定こども園でのワークキャンプの3日間をとっても楽しみにしていた。

初日、私は3歳児のクラスに入らせてもらった。いざ始まるとなると、「怖がられないかな」と少し不安が頭をよぎったが、そんなものはすぐに無くなった。教室に入った途端、
「おねえちゃん、いっしょにいこう」
と女の子が私の足にしがみついた。私は驚いたのと同時に、3歳児の純粋な行動に接し不安がなくなった。

この日は、そのあとプール遊びがあり、私は着替えの手伝いをするようになった。先生に「子どものほうから声がかかるまでは何もしなくて良い」と言われていたので、その通りにしていた。すると、ラッシュガードのファスナーをしめてほしいと半泣きになった男の子に頼まれた。私は一番下の金具の部分だけを噛み合わせて

「ここから自分で引っ張ってみて」

と言って、その子自身に残りをやらせてみた。するとスムーズにファスナーがしまった。半泣きだったその子は

「じぶんでできた」

と嬉しそうに笑ってジャンプした。

ここで私は、しなければならない2つのことに気付かされた。1つは、その子が「できる」ことを、その子が実践できるようにすること。もう1つは、少しでもその子が「できる」ことを見つけて、それを実践する手助けをすること。つまり、子どもの主体性を尊重し、子どもからできることを保育者が奪わないということだ。特に3歳児は、イヤイヤ期に差し掛かっている子が多く、少しでも自分でできないことや理不尽なことがあると、駄々をこねたり、泣いてしまったりする子がほとんどだった。でもその子たちは、自分でできる事を発見したり、できたことを褒められたりすると、とても喜んでいて。そして、子どもの喜びを私たちも共有することができることを知った。

次の日は、4、5、6歳のクラスだった。

教室に入る前、昨日のことを念頭に置き、この子たちは何ができるのかなと楽しみにしていた。そして私が教室に足を踏み入れると、すぐに女の子2人が走ってきて、私をおままごとのコーナーに引っ張って行った。かと思えば、一人の子が「あのな、前な、おもちゃ王国行ってな、」と得意げに話し始めた。私が突然始まったその話を聞いていると、それを遮るようにもう一人の子が、
「私なんかな、もっとすごいで。あのな、」

と話し始めた。私は2人が同時に話しているのを必死にきいていた。すると別の子たちが3人来て、皆が私の膝の上に座り、それぞれ違う話を始めた。私はさすがに聞き取れなくて笑いそうになったが、そこで子どもの成長を身をもって感じた。3歳児クラスでは、私が尋ねなければこんなに話さなかったし、何よりこのクラスでは小さなめごとが度々起こっていた。それはそれぞれの自己主張が激しく、それが相手に上手く伝わらなくて衝突しているのが原因のようだった。

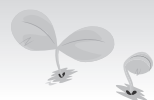
このように、目に見える形で問題が起こった時、初めて私はその年の子たちの特性を感じとることができた。それができたのは、普段から子供たちが大人に制限されずに、ありのままに行動することができているからなのかな、と思った。そして3日間で違う年の子たちと過ごす中で、たくさんの成長を感じることができた。

こんなに素晴らしい機会があり、本当に良かったと思った。この経験がこれから先、どこかで必ず生きてくるだろう。

優秀賞作品

高校生の部

キラキラ言葉



神戸市立須磨翔風高等学校

3年 松村 美果

「今日一日、みんながキラキラ言葉で過ごせますように。」

初めてこの言葉を聞いた時、このキラキラ言葉というものが何なのか私には分からなかった。

ワークキャンプ初日、私は不安でドキドキという感情ではなく、楽しみでワクワクした気持ちで施設に向かった。私が今回のワークキャンプでお世話になったのは、保育園。普段、子どもと関わる機会が少ないからという理由も1つではあったが、自分自身が幼稚園に通っていたということもあり、純粋に保育園では子ども達とどのように関

わっているのか気になったからだ。

私がお世話になった保育園ではキリスト教保育を行っており、毎朝神様に向かって、お祈りを捧げる。お祈りすることは子ども達によって、全然違う。

「けがなく過ごせますように。」というお祈りだったり、

「育てているなすさんが元気にすくすくと育ちますように。」

いろんなお祈りを聞いていた中である女の子がこう言った。

「今日一日、みんながキラキラ言葉で過ごせますように。」

これを聞いた私は、「キラキラ言葉って一体何だろう。」と考えた。

お昼寝が終わった後、みんなで外で遊んだ。おにごっこをしたり、リレーをしたり、かくれんぼをしたり、いろんな遊びをした。その中である2人の男の子が、言い合いをしていた。

「次、おにごっこしよ。」

「嫌や。リレーする。」

「さっきもしたやん。2回もしたくない。」

次、何の遊びをするのかでけんかをしていた。けんかの中では、ばかとか嫌いとか悪口も言っていて、さすがに止めようと思って2人の間に入ろうとした時、

「2人とも、キラキラ言葉使わなあかんで。」と女の子が入ってきた。そこで私は、

「そうやんな。じゃあ、何て言ったらキラキラ言葉になるかな？」

と聞いてみた。すると、男の子2人がお互いに謝って、自分達の手で仲直りをしていた。後からキラキラ言葉のことを改めて聞いてみると、

「キラキラ言葉は、相手が言われて嫌な気持ちにならない言葉のこと。」

と教えてくれた。言われてうれしいことを言うことで自分自身も周りの子も笑顔になることから、キラキラ言葉という名前が生まれたことを聞い

て、小さい子がこんなことを考えることができるなんてすごいなと思った。

2日目から、見ていて分かったことは年上の子が年下の子のお世話をしあげているということ。トイレについて行ってあげたり、ご飯を持ってきてあげたり、年上の子が年下の子の面倒を見てあげることで、他人を思いやる気持ちが育つのだろうなと思った。

もう1つ分かったことは、先生方も一緒に楽しんで遊んでいること。私が一番おどろいたのは、子ども同士でけんかしていても、間に入って仲直りさせようとしないうところ。

「子どもがけんかする時って、何かしらお互いに思っていることがあると思うから、仲直りさせようと思わないし、仲直りしなさいとも言わない。子ども達は自分の力で解決することができるから。」先生に質問すると、このような返事を頂いた。

このことを聞いた私は、大人がこうしようと思っているよりも、子どもの方が考えているだろうし、一人一人の気持ちをしっかりと考えていてやっぱり保育士さんはすごいなと思った。

今、この世の中ではこうすることが正しいとか、みんながしているからといった理由で自己主張が少なくなっている。私自身も周りの意見に流されてしまったり、自分のことばかりになってお母さんにもいろんな迷惑をかけている。この状況だからこそ、子どもたちのように自分の考えをしっかりとって、大人になって周りに流されないようにしようと思う。そして、このワークキャンプを通して知った、キラキラ言葉も日常生活で取り入れていこうと心から思った。

優秀賞作品

高校生の部

最後のワークキャンプを終えて



兵庫県立神戸甲北高等学校

3年 横山 天来

私は今回で4回目になるワークキャンプに参加しました。今年私は高校3年生なので高校生活最後の、そして人生最後の体験活動でした。今年体験した事は将来活かせることばかりでした。

私は看護師になりたいという夢があります。そしてもともと福祉にも興味を持っていたので、高校へ入り、自分で授業を選択できるという特色を活かして看護と福祉の授業をできるだけ選択するようにしていました。そうするうちに私の夢は高齢者福祉施設で働く看護師になりたいという風になりました。その夢に活かせることを探し、学ぶために私は毎年ワークキャンプに参加していました。毎年違う高齢者福祉施設へ行き、それぞれの所で学ぶことや感じることは年々変わっていきました。去年までの施設では看護師の方と関わることがなく、利用者の方と関わったり、職員の方の姿を見て学ぶことがほとんどでした。しかし今年は看護師の方のお話が聞けたり、医務室の中を見学させていただいたり私の一番したかった事が出来ました。

医務室の中で看護師の方に病院の看護と施設の看護の違いを教えてもらったり、仕事内容や薬と機器などの説明をしてもらったりしました。施設には医師の方がいないからこそ看護師の方が早く異常に気づき病院へ連絡したりするなどの迅速な対応が必要という話を聞きました。それを聞いて普段から利用者様のことをちゃんと見て小さな変化でも見逃さないようにすることが大事だと感じました。

他にも福祉車両やミキサー食などの食事体験もさせて頂きました。福祉車両は道路で走っている所を見たことがあっても自分が実際に車イスに

乗って、揺れる感を体験することがなかったのが貴重な経験が出来ました。揺れを減らすためにデコボコしている所や曲がる時など気をつけて運転しないと、車イスに乗っている人は怖い思いをするということを身をもって感じました。食事体験ではミキサー食やキザミ食などを食べて形が分かる状態で食べられることが幸せなことなのだと感じました。ミキサー食でも分からないからと全部まぜたりするのではなく別々で「これは魚です」のような声かけをして少しでも味わってもらうことが大事だという話を聞きました。食事介助をするときは「口をあけて下さい」と言うだけでなく食べ物の説明を加えて、少しでも利用者様に食事を楽しんでもらおうという工夫がされているのだと思いました。

私が3日間で印象に残った事は1日の水分摂取量についてでした。毎日職員の方々が水分をとるように促して下さいと朝礼で言っていたり、どうすれば飲んでくれるのかを相談しあっていたりして、水分摂取量はやはり問題になっているのだと感じました。クーラーが効いていても水分はとらないといけないので、スポーツドリンクやジュース、コーヒーなど個人個人の好きな物を用意していました。これはこの先も問題になってくことだと感じたので、私も少しずつそのことについて考えていこうと思いました。

1日目、2日目、3日目と日が経つうちに利用者様と1回で関われる人数も増えていき、最終日は数人の方と同時に話をすることができました。初日から利用者様と関わる時にかがんで話をしていたら担当の方に、そういうふうに初日から出来ているのいいねと言ってもらえました。その時に学校で福祉の勉強を行い、学校ではなく現場でしか学べないことを毎年ワークキャンプで学んできて良かったと思いました。毎年の積み重ねで自分が少しずつ成長していると感じられる瞬間でした。

中学3年生から4年間、毎年ワークキャンプへ行くたびに興味が深まり福祉に関わる仕事に就き

たいという気持ちが強まっていきました。私に福祉の仕事の良さ、楽しさなどを教えてくれて、様々な事を学ばせてくれたワークキャンプには感謝しています。初めに言ったように私は今年が最後の体験活動でしたが、今後、高齢者福祉施設の看護師になった時に、福祉について興味をもってもらえるように施設側の人としてワークキャンプに関わることができればと考えています。

優良賞作品

中学生の部

ワークキャンプを終えて



神戸市立伊川谷中学校

2年 秋定 葉月

私は、今回のワークキャンプでコミュニケーションも大切だけれどまずは、表情、笑顔が大切だということが分かりました。私はあまり、自分から積極的に話しかけるというのが得意ではありません。それを変えたくてワークキャンプに行こうと決めました。はじめはあんまり話すことができず、ただ一緒にいるだけのようなものでした。でも、笑顔ということだけはできたので、笑顔でいたら利用者さんから話しかけてくださいました。そこから私も少しずつ話せるようになりました。職員の方々もずっと笑顔で利用者さんと接していました。そこで、笑顔で接することは、人に安心感をあたえるんだということが分かりました。それはどんな人でもそうなんだということも分かりました。笑顔はどんな言葉よりも人々に安心をあたえてくれるものなのかなとも思いました。

職員の方々のすごさも感じる事ができました。職員の方々は自分のことよりも利用者さんのことを優先していました。今の私はまず自分のことをやってから、周りのことを見るという感じになっています。でも、職員の方々は利用者さんを優先して、いやな顔一つ見せず笑顔でいるのが本当にすごいなと思いました。きっと利用者さんも

そんな職員の方々が好きなんだということが伝わってきました。私も大人になったときに人のことを優先できる人になりたいと思いました。

私は、高齢者デイサービスセンターに行きました。施設ではどんなことをしているのか気になっていました。行って見てみると想像していたより大変そうでした。たくさんの利用者さんを2、3人で見ていたのでびっくりしました。お風呂は一人一人入れてあげたり、ごはんの用意をしたりしていました。でも洗濯は利用者さんがたたんでいました。自分でできることはしっかりやっていたので、それは何歳になっても大切なことだなと思いました。そして、職員の方々も利用者さんが自分でできることには、手を出さずに見守っていました。見守るということも時には大切なんだということが分かりました。

私は今回のワークキャンプを通してたくさんのことを知り、学ぶことができました。そして、いろいろな体験をすることができました。これから、笑顔でいることを忘れずに、今回学んだことを生活に活かしていきたいです。職員の方々や利用者さんとの思い出も忘れずに、胸にしまって生活していきたいです。

優良賞作品

中学生の部

ワークキャンプで得たもの



神戸市立北神戸中学校

3年 才木 理

中学2年生で初めて興味を持った、このワークキャンプ。私は昨年も今年も保育園で多くのことを学ぶことができた。2年生の頃は、まだ接し方や会話の取り方など何もわからずとりあえず自分の出来る限りのことをしようと思った。そうすると3日目の最終日になると、一人一人と打ち解けあい、夏休みにとても貴重な経験をさせていただくことができたのだ。だから今年も自分の全力を

この夏休みで出してみよう、そう思ったのだ。

門を開けるとやっぱり、昨年と同じ緊張がよぎった。窓ガラス越しに見える元気に走り回っている子達に解け込めるのか、正直不安でしかなかった。でもその不安はすぐになくなり、大きな声で挨拶すると、「おはよ！」と元気一杯返してくれた。すごく嬉しかった。

何より私がすごいな、と思ったのが「歌」だった。私達中学3年生にもなると大きな声で歌う、ただそれだけのことなのに、恥ずかしい気持ちやめんどくさい気持ちなどがでてきて校歌の声が小さいとよく言われることがあるのだ。それに比べて保育園の子達は、大きな口をあけて、どんな曲でも一生懸命歌っているのだ。私は同い年の子にこの姿と一緒に見てほしいと思った。すごい、というよりも感動すら覚えた。

幼児の子達と同じ立場になってみると、遊び方や話し方が今までと違っていて難しかったが、慣れていくと「今日の靴下可愛いの。」や「これ見て見て〜。」と何気ない事でも凄く楽しかった。

4才、5才では「覚える」というのがとても早く、すぐ行動にできていて、自分も初心にもどって行動や言動をしないといけないと改めて学んだ。

幼児のみんなと一所懸命向き合うことで、自分のことを見つめ直すこともできたし、学ぶことも多くあった。職員の方に保育士さんが続けている理由は何ですか、と聞いてみると、「一番成長が見れて、子ども達の笑顔がつらいときに癒されるからかな。」と言っていて、確かに私が将来なりたと思っていた仕事は別にあったけど、保育士さんになるのも一緒に幼児の子達と成長していける良い場所だなと思った。高校生になったら次は高齢者福祉施設に行ってみようと思う。

優良賞作品

中学生の部

体験を通して



松蔭中学校

3年 栢見 日奈

高齢化社会の日本だからこそおきる介護問題。「認知症」「家族での介護疲れによる殺人や自殺」などのニュースが増えてくるようになって、介護の大変さを少しは理解していた。また自分自身も、いずれは避けて通れない道なんだろうと思い今回のワークキャンプを体験することにした。

体験をして特に印象に残ったのはスタッフさんの明るさだ。利用者さんと話す時のスタッフさんは元気で明るい声と笑顔で利用者に接していた。その姿を見て、私もこの3日間でスタッフさんの様になりたいと思い、積極的にたくさんの方に喋りにいくよう努力したが、それが今回の難関だった。施設には認知症の方も多く、その方とどう接したら良いのか何をすることがベストなのかという悩んだ。ある方が、

「私の家ね、お百姓なの」

と言い話が一段落し、少し間があくと、聞こえてくるのは同じ話だった。その度に私は、「その話さっきも聞いたよ」と思い伝えようとしたが、その時私は、スタッフさんに「同じ話を何回したとしても利用者さんにとってはその会話は初めてだと思っているんだよ。」と言われたこと思い出した。それならどうすればいいのか、と思い笑顔でうなずいたり、質問してみたりとたくさん試した。すると、利用者さんはさっきよりも笑顔になり、戦争中の出来事や、働いていた時の職場の話など、違うお話もたくさんしてくださった。体験する前までの私は、認知症を患っていると聞いただけで勝手に壁をつくっていた。なぜなら、高齢者ドライバーで事故を起こした多くは、認知症だったというニュースを見ていたから。何をされるかわからない、と勝手に恐れていた。けど今回そんな壁

は壊された。利用者さんは優しく明るく私に接してくださった。

「こんな暑い中わざわざ来てくれてありがとう。悪いねえ。」

と言ってくださった。私の認知症の方は怖いという偏見はどこか遠くに飛んでいった。と同時に、偏見は良くないということを痛感した。

施設では、利用者さんの自立を妨げてはいけませんが、本当に困っている時には力になるのが私の役目。今回初めて、車いすを押させていただいた。進む前は、利用者さんの足がちゃんと台に乗っているかを確認し、進んでいる時は、手や足がどこかにぶつかっていないかをチェックすると、スタッフさんに教えていただいた時、なんだ、簡単じゃないかと思ったが、実際やってみると、車いすは意外と重くゆっくり進むので精一杯で、細かい所まですることを忘れがちになった。でも、車いすを押し終わると利用者さんは、「ありがとう。」と言ってくださり、私は素直に嬉しかった。

「自立を妨げず、でも困った時には助ける」

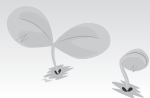
このことは、高齢者施設だけではなく、私たちにも大切なことだと思った。そして何よりも、こういうことは体験してみないとわからない。学校に行っても学べない。この3日間で得たことを忘れないためにも、これからもボランティアに積極的に参加していきたい。



優良賞作品

高校生の部

「ありがとう」言葉の力



兵庫県立長田高等学校

1年 北川 真衣

「ほんとうに、ありがとうね。」今まで何回言われたか分からない言葉。しかし、この言葉にこんなにも感動し、感謝し、嬉しい気持ちになったのは初めてだった。

私が実習させていただいた老人保健施設は、介護を必要とする高齢の方が、自宅での生活に復帰することを目標に、集団生活、生活のリハビリをする施設だ。

3日間のここでの実習の中で私はたくさんの方にお世話になり、様々な経験をさせてもらった。昼食準備や食事補助、レクリエーションの手伝い、お茶・おやつ配膳、シーツ交換、利用者さんとのコミュニケーションなどだ。これらの仕事は、職員の方が時間のない中、丁寧に教えてくださった。仕事の内容だけでなく、なぜそうするのかという理由もだ。また、休憩時間に一緒にお弁当を食べた介護士の方からは本当の苦労や大変さ、仕事でいちばん嬉しい瞬間を直接うかがうことができた。

3日間で私が最も印象に残ったのは、利用者さんとのコミュニケーションだった。足が悪い利用者さんが勝手に立ち歩かないように見守っていて欲しいと職員の方に頼まれ、2人で座っていたときだ。私は利用者さんと何か会話をしたいと思い、いろいろ質問をしてみた。「好きな食べ物とかありますか？」

「昔ペットを飼われていましたか？」

しかし、どんな質問をしても

「ううん…」

と、顔を曇らせてしまうばかりだった。勝手に立ち歩く、自分のことを覚えていない、私はこのとき初めてこの利用者さんは認知症なのかもしれな

いと思った。たくさん質問されて、でも何も覚えていなくて、答えることが出来ないことの繰り返し、利用者さんをととても辛くさせてしまったことに、私は猛烈に反省した。どうすればこの利用者さんと楽しく会話ができるか、考えた。そこで、自分の話をしてみることにした。空手道部に入ったこと、学校の体育のこと、家がこの施設の近所にあることなど…。すると、利用者さんはさっきとは別人のように明るい表情で楽しそうに話を聞いてくださった。2人で一緒に笑う瞬間が増えた。とにかく嬉しかった。実際に直接接しないと分からない喜び・学びだった。

また、別の利用者さんと絵本を読んでいたときだ。絵本を読みながら楽しく会話をしていたのだが、突然

「あのね…」

と利用者さんが話し始めた。その利用者さんには誰よりも大切な、とても優しい義理の弟がいて、必ず週に1回は遠方から会いに来てくれて、楽しい話をしてくれたそう。しかし、そこからポツリ、ポツリと話し始めた。

「でもねえ…。この前亡くなったの…。今も後ろにいてる気がしてね。頑張れって言ってくれてるの…。」

止まらない涙を必死でこらえながら、その義理の弟のエピソードを私に聞かせてくださった。私も涙が止まらなかった。そして、話し終わった後「ほんとうに、ありがとう。ここに来てから誰にも話せなかったの。話せて楽になった。ありがとう。」不謹慎だとは分かりながらも、私はこの言葉がとても嬉しかった。私に話したおかげで、少しでもこの利用者さんの気持ちが楽になったなら、私がここに来た意味があったのかなと思った。何より私にだけ話してくださったことは、3日間の実習の中で、私に心を開いてくれた証拠ではないかと思った。

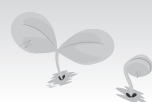
3日間の本当に貴重な体験で学び得たことは、思い返すだけなら簡単だ。しかし、それを自分に

取り込み、実行しなければ意味がないと思う。これから先、私はまわりの人から相談したいと思われる人間になりたい。私に話すことで、まわりの人の気持ちが少しでも楽になってほしいと、この実習で感じた。そのためには、信頼される人間になる必要がある。日々の中でささいな言動にも気を配り、自分がされたらどう感じるかを考えて行動する。そういった小さなことの積み重ねが大きな信頼を生むのだろう。今、私ができることはこのようなことしかない。だが、これが難しい。利用者さんの「ほんとうに、ありがとう」の言葉を原動力にして、大きく豊かになった心を大切に、成長していきたい。

優良賞作品

高校生の部

ワークキャンプを終えて



神戸常盤女子高等学校

3年 八井 杏莉

高校最後のワークキャンプは3歳児を担当しました。3歳児を担当するのは2回目だったので、余裕を持って参加することができました。子供たちはとても元気で人見知りな子が全然おらず笑顔でたくさん話しかけてくれたので緊張せず楽しく過ごせました。

今回たくさんの行事がありましたが、私が一番思い出に残っているのはお誕生日会です。7月に誕生日を迎えた子供たちが先生と一緒にみんなの前で名前や将来の夢などを発表しました。自分が担当したクラスの子供たちが大きな声で堂々と発表していてすごいと思ったし、親のような目線で見てしまいとても感動しました。その後クラスごとに日頃から練習している曲を合唱している姿はとてもカッコ良かったです。歌い終わり戻ってきた子供たちに「上手だったよ」と褒めると、とても嬉しそうな顔で「お姉ちゃん先生ありがとう」と抱きついて

くれた子供たちはとても可愛かったです。

活動していくなかで保育士の仕事の大変さや難しさをたくさん学ぶことができました。

1つは、おもちゃで遊んでいる時に起きたトラブルです。5・6人で積み木やパズルをしている時に、2人の子供が1つの積み木やパズルを取り合いしていてその場にいた友達が私のところへ言いに来ました。でも私は、福祉体験として活動しているので、子供たちの間に入り解決していいのか分からず対応に困っていました。すると、子供たちが自分たちで話し合い解決していて驚きました。3歳なのにすごいなと思っていたと、おもちゃで遊ぶ前に先生が子供たちに遊ぶ時のルールを確認していた事を思い出し、毎回のルール確認をしっかり理解して実行しているのは本当にすごいなと思うと同時に、先生方の努力と指導力に感心しました。

2つ目は、待ち時間の過ごし方です。トイレが終わって全員が揃うまでの時間や昼寝前の本読みまでの時間、子供たちは何もすることがないので友達と大きな声で騒いだり廊下を走り回ったりしていました。危ないので私が注意をしても聞いてくれない子もいてその様子を見ていた先生が、「みんなこんな事できる？」と先生が片足立ちや手遊びをし始めました。するとそれを見た子供たちも走るのをやめ、先生の真似をし始めたのです。その様子を見ていた私は「このような対応の仕方もあるんだ」ととても勉強になりました。怒ってやめさせることも大事だけど、手遊びなど子供たちの好きな事をして注意を向けさせてやめさせるという子供たちに合わせた対応をとっていた先生は本当にすごいなと思いました。

先生だけでなく子供たちからもたくさんの事を教わりました。私が重い荷物を持っていると「お姉ちゃん先生、大丈夫？」と声をかけてくれて、人に対する思いやりの心が育っているんだと感じました。他にも着替えの時ボタンをうまく付けられずにいる子供に、「手伝おうか？」と聞くと、「自

分で頑張るよ」と言って付けることができ、何事も諦めずに最後までやり遂げる力が備わっているんだなと思いました。このような思いやりの心や何事にもチャレンジしようとする力を身につける事ができる保育園は、子供たちにとって大切な場所だと改めて実感することができました。

私はこの3日間保育士の仕事を体験し、大変だった時や疲れた時もありました。でも子供たちの笑顔を見てたくさんの元気をもらうことができました。そして何より先生方がいつも笑顔で接しているからこそ子供たちも笑顔になれるのではないかと感じました。

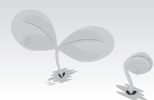
保育士は子供が好きという気持ちだけではできない仕事だと思います。子供を第一に考え、子供と一緒に成長できる保育士になりたいと今回のワークキャンプで強く思いました。

子供たちと先生方のおかげで、多くの事を学ぶことができ、自分自身大きく成長する事ができました。学んだ事を忘れず今後活かしていきます。3日間ありがとうございました。

優良賞作品

高校生の部

「素直に伝える」大切さ



神戸野田高等学校

3年 原 希実

「ごめんね」

いつからだろう。おばあちゃんにこの言葉を言えなくなったのは。

活動中、ある男の子の言葉にハッとさせられた。私はこの言葉を聞くために児童館に来たのだと思う。そして、私が普通だと思っていることが、偏見や思い込みだったということに気づかされた瞬間だった。「〇〇くんがズルした！」そんな叫び声が聞こえ、私は急いで声のする場に駆けつけた。そこにいたのは、泣いている女の子と、女の子を慰めているもう一人の女の子。そして、バツが悪

そうな顔で立っている男の子がいた。床には何枚かのカードが散らばっており、どうやら坊主めくりをしていたようだった。「どうしたの」と私が聞くと、泣いている女の子はますます声を上げて泣き出してしまった。「あのね、〇〇くんがズルして〇〇ちゃんのカード取ったの！」代わりに答えてくれたのは慰めている女の子。

「なんでそんなことしたの？」男の子に聞きながら、私は頭の中で考えていた。この問題をどう解決したら良いんだろう。私がかけるべき言葉はなんだろう。すると私の耳に聞こえたのは「だって勝たなかったんだもん。」という声。男の子の口から出てきた言葉は、実に素直なものだった。「だからって、ズルしても良いのかな？」私は自然と出てきた言葉をそのまま男の子に伝えてみることにした。「もし自分がズルされたら嫌じゃない？」すると、男の子は「いや！〇〇ちゃん、ごめんね！」と相手の目を見て、はっきりと言った。

今でも鮮明に思い出すことができるこの出来事は、私に一つのことを教えてくれた。それは、「子供たちは素直な気持ちを相手に伝えることでお互いの感情を理解し、人との関係を深めている」ということ。素直な言葉は時に人の心に突き刺さる針となる。だが同時に、人を思いやる言葉になるのも事実である。男の子のように、「悪いことをしてしまった」と思ったから自然と「ごめんね」の言葉が出てきた。「ごめんね」も「ありがとう」も当たり前だけど大切な思いやりの言葉だ。一方で、大人に近づく私たちは素直に伝えるということをしてしない。例えば、誰しも意地を張ったせいで謝れなかった経験があると思う。私もその経験をした一人である。

以下は今回私が児童館でボランティア体験をするきっかけとなった出来事だ。「昔ののんちゃんももっと優しくなったのに！」学校から帰ってきたばかりの私に、祖母は叫んだ。はあ、とため息をついたのは、今から長い愚痴が始まる予感がしたから。

私の祖母は2年半前に要介護認定を受け、現在は在宅ケアという形をとり、一緒に暮らしている。私は受験勉強に打ち込むため、毎日夜遅くまで学校に残る日々。それゆえ、私の帰宅が遅いことを泣きながら「寂しい、私が死んだらあんたのせいや!」と訴える祖母の姿はよく見る光景だ。その日も私は「はいはい、わかったから」と乱暴な言葉を投げ、自分の殻に閉じこもった。10分くらい経っていただろうか。私のイライラが収まり、同時に感じたのは、自分自身への疑問。「どうしてごめんねを言えなかったんだろう。」そう、私は謝ることができなかった。そして今、もう一度自分に問い、考えてみる。なぜ男の子が言えた「ごめんなさい」が私には言えなかったのか。私は伝えなくても大丈夫だと思ったからだと思う。私たちは歳を重ね学校や家族の中である程度の経験を重ねると、相手に全ての感情を伝えなくなってしまふ。それは人間関係を円滑にし、周囲とうまく付き合っていく上で必要な社会的能力である。だが、それに囚われない子供たちは、相手を理解することがとても上手だ。子どもと大人では生きている世界が違う。そのため、同じように振る舞えないのも事実だと思う。では、私たちが素直に伝えることは不可能なのか。いや、私は違うと思う。複雑な社会で生きる私たちに必要なのは、バランスをとることなのではないだろうか。伝えるべきことは素直に言葉にし、時には伝えない選択をとることでうまく人間関係を構築していく。そして、私たちは相手を思いやる心を忘れない人間になる。これが17歳の私が経験し導き出した答えだ。

人に思いを伝えるとはどういうことか。私は相手と向き合うことだと思う。これから先に出会う沢山の人と向き合って多くの言葉を伝えたい。そして、聞きたい。今までできなかった、祖母の言葉をきちんと聞いて、理解したい。

今回ワークキャンプの参加するきっかけとなった祖母に私は未だ謝れていない。だが、きっと子供たちなら言うだろう。「お姉ちゃん、おばあちゃ

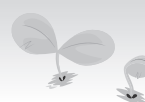
んに優しくしてあげて!」と。

本当にそうだね。私は心の中で何度も頷いた。今の私なら祖母にきちんと伝えられると思う。「おばあちゃん、ごめんね。」そして「大好きだよ。」

佳作作品

中学生の部

学んだことをいかして



神戸市立原田中学校

1年 山本 万帆

私は、今回のワークキャンプでの活動で、保育所に行かせていただいたのですが、子どもたちに、たくさんのことを教えてもらいました。子ども達と過ごした3日間は、私にとって、大きな経験になりました。

私がこの活動に参加しようと思ったのは、私の妹には知的障がいという障がいがあり、私は昔から、「福祉のことを大切にしたい。」という思いがあったからです。そして、障がいのある方のことだけではなく、自分よりも幼い子ども達と接することで、自分の福祉への理解の幅を広げようと思ったことが理由です。

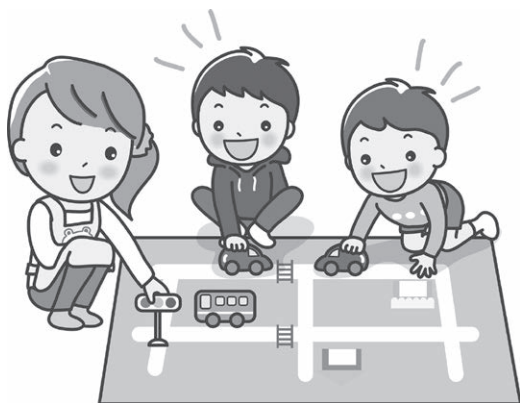
私は今回、4才児のクラスで体験をさせていただきました。私は、子ども達と過ごして学んだことがあります。1つ目は、初めて会う人に対しての接し方です。初日の活動で私はものすごく緊張していたのですが、子ども達は笑顔で「一緒に遊んでー」と話しかけてくれました。子ども達がそんな風に接してくれたので、私もリラックスして子ども達と過ごすことができました。普段、私たちは初めて会う人に対して、かしこまったりしてしまいがちです。特に、私は初対面の人に対して固くなってしまいがちです。だから、子ども達のように、初めて会う人に対しても、元気に笑顔でいたいと思いました。

2つ目は、あいさつです。私たちは、毎朝、家族や友達、学校の先生などにあいさつをします。

でも、私たちは、どうしても声が小さくなりがちではないでしょうか。しっかりと笑顔ができていますか。子ども達のあいさつは元気いっぱい、私たちのあいさつよりも素晴らしいものだったと思います。私たちも子ども達のように笑顔で元気にあいさつをしなければいけません。私は、もう一度自分のあいさつをみつめ直そうと思いました。

最後に私が気付いたのは、子ども達の「一生懸命」です。どういうことかということ、子ども達はどんなときも「一生懸命」に取り組んでいました。例えば、遊ぶときは友達と精一杯遊んだり、給食のときは残さないよう頑張ったり。そういう場面で、手をぬかず、一生懸命取り組んでいるように見えました。私たちは、「頑張ってやること」と「それなりにやること」で、分けて生活してしまっていると思います。部活動などの練習で、声が小さかったり、授業で集中していなかったり。もちろん、休憩するのは大切なことですが、私は自分もう少し頑張れるんじゃないかと思っています。だから、子ども達のように、何事も自分の全力で、やれるだけやってみようと思いました。

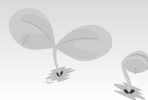
今年の夏休みは、人として成長することができました。それに、福祉のことについてもしっかりと学ぶことができました。子ども達に教えてもらったことを忘れず、元気に過ごしていきたいです。来年も、ぜひ参加したいと思います。



佳作作品

中学生の部

初めてのワークキャンプ



神戸市立横尾中学校

2年 藤本 紗綾

私は今年初めて、ワークキャンプに参加させていただきました。ワークキャンプでは、児童館で学童保育支援の体験をしました。最初は障害・福祉と児童館、どちらにしようか迷いました。母に「ワークキャンプで福祉体験したいのだけれど、障害者施設と児童館で迷っている。」と言うと、母はなぜかとても喜んでいてすごく真剣に話してくれました。私は障害支援やサポートについてとても興味があって障害のことを勉強するのが好きです。それでも児童館を希望したのは、母との会話から児童館への興味が増したからです。私の母は児童館に勤務しています。私と母はほぼ毎日、その日あったことを話しています。その毎日聞く母の話はとても面白くて楽しいです。私も母の様な職業を体験してみたいと思い第1希望に児童館を選びました。

ワークキャンプの初日、私はとても緊張しました。子ども達と仲良く3日間過ごせるかどうか心配だったからです。でも、自己紹介をすると、すぐに子ども達が来てくれました。

子ども達が「一緒に遊ぼう。」と言ってくれて緊張もほぐれました。同時にとても嬉しい気持ちがいってきました。私はその時思いました。子どもは、不思議な力を持っているなど。

1日目は先生と同じようなことが出来るように、子ども達とふれあいながら先生達の動きを観察していました。その日私は疲れましたが、子ども達はとても元気でした。正直、もう帰りたいと思ったことが何度もありました。でも、子ども達が「遊ぼう。」と言うその言葉がとても嬉しく感じ、元気ができました。そのおかげで私は初日を楽しめることができました。やはり先生はすごいなと

その日実感しました。

2日目になると子ども達の顔と名前を覚えることができました。その日は私の中に悩み事が出来ました。それは、なかなか一緒に会話ができない子たちがいることに気づいたのです。今日はあの子たちと会話さえできたらいいと思い、笑顔で話しかけました。

「今なにしてるの？」と聞くと「本を読んでもうだけ。」と言いつぐどこかに行ってしまいました。その子たちはよく先生に怒られている子たちで、先生達でさえいい手段が見つからない様子でした。私は後1日しかいれないので、なんとか仲良くなろうとしても無理で残念でした。

また、その日は、違う児童館の夏祭りに参加する日で、子ども達が全員移動します。みんないつも先生の話聞きかたなのに、その日はしっかりと聞いていて、子どもって面白いなと思いました。夏祭りでは、私が気になっている子たちと話せるチャンスかもと思い、色々と話しかけてみましたが、やはり反応しませんでした。

そして最終日の3日目は、せいっぱい遊びました。遊んでいる最中に、急に私に聞きました。「今日で最後なの？」と言ったので、私は「そうだよ。」と応えました。すると、予想もしなかった言葉をかけてくれました。

「時間が空いていたら、またここに来て、一緒に遊んで。」私は「うん。もちろん。」と言いました。その時、私は涙がでそうなほど嬉しくて感動しました。

そして私が最後の挨拶をしたあとに、この3日間で一番嬉しい事がありました。それは、なかなか話せなかった子達が、私の所に来て何をするのかと思うと、折り紙で魚を作って、「3日間ありがとう。」と言ってプレゼントしてくれました。その後、私の手をにぎってくれました。

先生は子どもの気持ちを理解していて、叱る時は、優しいムードで、きびしく指導していました。私がもし将来、先生になったらこの3日間学

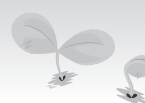
んできたことをいかしたいと思います。トライやるウィークでもまた、この児童館に行きたいなと思いました。

横尾祭りでは、子ども達が吹奏楽部の演奏を聴きに来てくれました。楽器にも興味をもってくれて、つながりが出来て良かったと思います。

佳作作品

中学生の部

あなたが話しかけてくれたから



神戸市立桜が丘中学校

3年 藤井 咲蘭

「お姉さん先生！」園児の皆は、毎日そうやって話しかけてくれました。

私が3日間のワークキャンプでお世話になった保育園は、私が卒園した保育園であり、卒園後も弟のお迎えに行ったり、夏祭りや運動会に行ったりと、交流を続けていました。しかし今回は、「卒園児」としてではなく、あくまでも、福祉体験学習として行くので、普段のような軽い気持ちではなく、しっかりと責を果たそう、という気持ちで臨みました。

そもそも、今回私がワークキャンプに参加したいと思ったきっかけは、5月ごろにあった、散歩中の園児や保育士さんが車にはねられた、というニュースを見たことです。亡くなった方々のご冥福を祈る言葉がたくさんある中で、「保育士は何をやっていたんだ、きちんと子供を見ていなかったお前達が悪いだろ。」というような、心ない言葉を言う人もいました。おかしいだろ、と感情のままに反論を言おうとしましたが、保育士さんの仕事を体験したこともない私が、保育士さんの大変さを語ったところで薄っぺらい内容にしかならないな、と思いとどまりました。そう思ったことから、ワークキャンプに参加してみようと思いました。

私が入るとことになったのは、3歳児さんのク

ラスでした。教室に入ったとき、園児達は朝の会をしていて、私がドアをガラガラッと開けた時に、「えっ！誰!？」というような顔で見てきた皆の様子はとても印象深く、今でもはっきりと覚えています。朝の会が終わって遊ぶ時間になった途端に園児達が駆け寄ってきて、「名前は?」「どこの学校なん?」「何でおるん?」と質問攻めにされて、あまりの元気さに圧倒されてしまいました。

保育士さん達の動きで特に印象的だったのは、お昼休憩の時の動きです。園児がお昼寝をしているときに、交代で休憩に行くのですが、休憩室で皆さん疲れているはずなのに、「〇〇組の〇〇君、今日はお母さん迎えやったっけ?」とか、「餅つきのお裾分けって配る場所減らしたんですよ?」とか、お仕事の話をされていて、本当にこの仕事が好きなんだなあ、と思いました。1日の中で唯一、「保育士」ということを忘れてまったりできる時間のはずなのに、それをしないでクラスやイベントの話をするなんて、私には考えられないな、とその時は思いました。

1日目、2日目、3日目と、日を追うごとに園児の皆が話しかけてくれる量が増えていって、私はとても嬉しかったです。その中でも特に嬉しかったのは、同じクラスのお友達とは全然しゃべっていなかった女の子が、皆と一緒に塗り絵をしているときに、私の耳元に口を寄せて、「あのなあ、ママがなあ」と小さい声で一生懸命話してくれたことです。あの時は本当に感動しました。それがきっかけで、その女の子はたくさん話しかけに来てくれるようになって、さらには笑顔もたくさん見せてくれるようになりました。この時、心の底からワークキャンプに来て良かったと思いました。

今回のワークキャンプで私は、見えないところで働いてくれている人のありがたさ、そして、人が話しかけに来てくれることの嬉しさを再認識しました。人間は1人では絶対に生きていけません。誰かの助けがあって初めて生活というものが成り

立ちます。私も、今回のワークキャンプに限らず、たくさんの人に助けられています。なので、これからは私が、見えるところでも、見えないところでも、人を助けられるような、そんな人間になりたいと思います。

佳作作品

中学生の部

ワークキャンプで学んだ事



神戸海星女子学院中学校

3年 熊谷 結祈

私は、児童との関わり方を学ぶために、ワークキャンプに参加しようと決めました。児童館に行った1日目は、思っていたよりもはるかに大変でした。後片付けをしない子、ほとんどずっと1人で本を読んでいる子、けんかをする子等にどのように声をかけたら良いのか全然わからず、正直3日間も活動できるか不安でした。1日目が終わった後日誌で、どのように関われば良いのか疑問に思った事をすべて書きました。その疑問に施設の職員の方が1つずつ丁寧にこたえて下さったことにより、2日目、3日目は様々な事を学ぶ余裕ができました。その中でも印象的だった事が3つあります。1つ目は、児童を褒める時、どんなに短い言葉でも心からすごいな、上手だなと感じて褒めた方が、ただ普通に褒めただけという時よりもとてもうれしそうでした。2つ目は、読み終えた本を元の場所に戻さずに別の遊びをしてしまう子に対して、私は最初本は元の場所に戻した方が良い、という事しかその児童に伝えていなかったせいか、その児童は同じ事をくり返していました。どう対処すれば良いのか職員の方に聞くと「本を元の場所に戻すべきという結論しか言っていないものよりも、なぜ元の場所に戻す必要があるのかという理由も言った方が伝わりやすい。」という答えをいただき、すごく納得しました。最初その発想は全く無かったのですが、自分も理由まで

伝えられた方が、なぜその行動をした方が良いのか理解して行動できるので、相手の立場に立っていれば、この発想もすぐ思いついていたかもしれないと思いました。3つ目は、本を読んでいたたり宿題をしたりして1人で集中して作業をしている児童に対してどのように声をかければ良いのかわからなかった時に施設の職員の方に「本を読んでいる子にはどのような内容の本だったか、宿題をしている子にはどのような内容のものだったか後で教えて、と伝える事で1人である子とも関われる。」と教えてもらいました。印象的だった3つの事に共通している事は「相手の立場になって考える」という事だと思いました。一見簡単そうに思えましたが、相手の立場になって考える事は常に必要なのにとても難しく、つい相手の立場になって考えられていないことが私は多々ありました。だから、自分が思っている以上に相手の立場になって考えられているか意識して活動することができました。私はワークキャンプで児童との関わり方だけでなく相手の立場になって考える事も学びました。この3日間の活動を通して、相手の立場になって考える事を学び、普段から意識するきっかけになったと思います。

佳作作品

高校生の部

ワークキャンプを終えて

神戸常盤女子高等学校

1年 松下 夢純

私はずっと保育士になりたいという夢があったので、とても楽しく、とても充実した3日間になりました。今回のワークキャンプではこども園の3歳児クラスでお世話になり、毎日たくさんのことを、学ばせていただきました。私にとっては2回目のワークキャンプだったので、今回は「子どもたちがかわいかった」だけで終わらないようにしようと思い、先生方のことをたくさん観察して

子どもたちとの接し方や援助の仕方などを学びました。

私が先生方を見て感じたことは、愛情の深さと子どもたちからの信頼です。先生は本当に子どもが好きなんだろうな、クラスの子たちが可愛くて仕方ないんだろうなと思うぐらい子どもたちにたくさんの愛情を注いでいました。普段はにこにこで、元気いっぱいの子どもたちと同じになって遊んでいる先生も子どもが危ないことをした時、友達に手を出した時は別人のようになって怒っていました。だめなことはだめと怒っている先生も最後は、「先生も怒りたくて怒っているんじゃないよ、〇〇ちゃんのこと大好きだから怒っているんだよ」と子どもに言い、怒られている理由も理解させていました。ただ優しいだけでは保育士は務まらないし、ただ怒るだけでは子どもの成長に繋がりません。良いときは笑顔で沢山ほめて、悪いときは理由を明確にして怒っている先生を見て、子どもたちが真っ直ぐに成長している理由が分かったような気がしました。

私は2日目の終わりに、けんかをしてしまったら、大泣きしてしまった時に、どうしたら子どもの心が落ち着くのが分からなくて1日の感想に書きました。すると先生は、「まず初めは同情してあげて下さい。しっかり話を聞いてあげて、嫌だったね、痛かったねと共感したら、子どもはこの先生は話を聞いてくれる先生なんだと信頼して落ち着いて話し始めてくれるから。」と教えてくださいました。私はこの言葉を聞いてすごく納得しました。先生からたくさんの愛情を注いでもらって、先生のことを信頼して、たくさん笑って、怒られて、泣いた子どもたちはすごく真っ直ぐで素直な子たちでした。ありがとうございますごめんねが、素直に言える子どもたちなのは先生の愛情をきちんと受け取っているし、大切にもらっていることを分かっているからだと思いました。

最初のうち、私は子どもたちがかわいくて、少しでも困っていたらすぐに手を差しのべてしまっ

ていました。すると先生に「本当にできない時は、子どもたちの方から言ってくるから手伝うのは最低限だけあとは自分でやらせてみて」と言われました。運動会に向けて、平均台を練習していた子どもたちは、得意な子と苦手な子で差が開いていきました。苦手な子が先生につかまろうと手を伸ばしていた時、先生は「〇〇ちゃんならできるよう、前を見て1人で進んで」と子どもの手を離させました。不安そうな顔が1人で渡り切って、自信にあふれた笑顔に変わった時、見ていた私もすごく嬉しかったです。小さな成長でも「すごいね」と一緒に喜べる保育士という職業はすごく幸せで素敵な仕事だと思いました。

私は3日間で先生方と子どもたちから多くのことを学ばせていただきました。私もこんな風に色んな方にお世話になってたくさんの愛情を受けてここまで育ってきたことや、

3歳の子どもたちでも言えるありがとうとごめんねを、16歳の私が言えなくなっていることにも気づき、考えさせられました。また、子どもたちの無邪気な笑顔は先生方の注意力や気遣い、思いやりがあつてのことだということもとても強く感じさせられました。子どもたちの命を預かっている保育士の仕事は責任重大だけど、子どもの成長と一緒に喜べて、子どもたちのことを笑顔にできる素晴らしい仕事です。ワークキャンプに参加して、さらに保育士になりたいという思いも強くなったし、そのために今は勉強を頑張ろうというやる気にも繋がりました。貴重な体験をさせていただいたこども園やクラスの先生、子どもたちには感謝の気持ちでいっぱいです。

佳作作品

高校生の部

寄り添う



須磨学園高等学校

1年 古関 愛祐

私は今回のワークキャンプで重度の知的・身体・重複障害を持っておられる方々と接し、気づかぬうちに偏見を持っていた自分に気づきました。行く前は特別に難しく考え、接し方への不安がありました。しかし、実際に色々お話ししたり、ジェスチャーでお話しているうちに、利用者の方からも色々質問して頂いて、テレビの話や自分の好きな事などで盛り上がりとても笑顔で話して下さい、勝手に壁を作っていたのは自分である事がよく分かりました。

施設で働く方々は、食事では、利用者の方ひとりひとりに合わせてスプーンがいるかどうか、ソースをかけるのか醤油をかけるのか、また全て1口サイズに切ったり、噛めない方にはきざみ食にしたり流動食にしたりと命にも関わる事である故、間違いは許されないため細部までの配慮が必要です。また、お茶が飲みたかったりお手洗いに行きたくてもなかなか自ら意思表示ができない為、施設全体でお茶を飲む時間を取ったり利用者の方にお手洗いにいくかどうかこまめに聞いたり、常に利用者の方に寄り添っておられる姿が印象的でした。

また「訓練」と呼ばれる、生活の質の向上のために体を動かしやすくする時間が1人ずつ設けられており、専門の先生と一緒に週に1度か2度訓練を行っておられました。ひとりひとり体操が異なり、歩き方の矯正をしてコケにくくしたり、コケたとき「手を付く」という行動を覚えてもらったり、バランスボールに乗って膝やお尻の筋肉を使ったりと様々でした。最初は訓練の先生に体を触られて嫌がることもあるようですが、嫌がらなくなったらそれが成長、と先生がおっしゃってい

ました。先生がお手本を見せて真似をしてもらう形で教えておられましたが、なかなかやる気や気持ちが付いていかなかったりと、難しい部分がありました。先生は、

「今は通じなくてもそれを覚えてくれていていつかやってくれることもあるから無駄ではない。無理矢理体を動かさせることは簡単だけど、それでは意味がない。医者や相手との心と関係なく処置すれば良いが、訓練では心が付いてきて本人がやるうとすることが大切。」

と、おっしゃっていました。私も実際の訓練の様子を見せて頂き、初めはなかなか通じなくても、先生が利用者の方の気持ちにゆっくりと寄り添って声を掛けたりしておられるうちにだんだんと利用者の方が先生に心を開いていっていただいたのを感じました。

バイオリンを演奏させて頂いた際には、皆さんが手拍子をしたりして曲に乗って下さって、ご要望を頂いてジブリや情熱大陸、ディズニーなどの曲を弾かせて頂きました。私は部活で演奏会を開いてお客様にお願いして聴きにきて頂くという経験はありましたが、お客様からお願いして頂いて弾かせて頂き、とても喜んでいただいた経験は初めてだったので大変嬉しくとても楽しい時間を過ごしました。後からお聞きした話ですが、利用者の方はなかなか演奏会などに参加するのが難しく、本物の楽器の音を聴ける機会が無いらしいので、とても喜んで頂けたようです。

さらに、ワークキャンプ最終日の翌日には施設の運動会が予定されており、私もボランティアとしてお手伝いさせて頂きたいとお願いして参加させて頂けることになりました。運動会では、どの競技も施設の利用者の方と職員の方がペアになり、歌に合わせて踊ったり、大玉転がしをしたり、ドーナツ食い競争をしたり、車椅子の方も多いのでペアの職員の方もお手伝いされながら白組と紅組に分かれて戦っておられました。私も職員側でペアに入れて頂け、ペアの女の子と一緒に参加さ

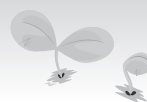
せて頂きました。ペアの方は車椅子だったため、初めて車椅子も押させて頂き、貴重な経験をさせて頂きました。

私は今回のワークキャンプを通して、障害をもつ方々に健常者が手を貸すことは多くても、障害をもつ方々に健常者の私達が心で励まされたり勇気づけられ、楽しい時間を過ごさせて頂きお互いに支え合っているものだと感じました。私は利用者の方々の笑顔を忘れずにこれからの日々を過ごしていきたいと思います。

佳作作品

高校生の部

潤いの場所



神戸野田高等学校

2年 村上 夢来

「好きですよ。」

旦那様のことについて尋ねると、そう答えたAさん。これは、ワークキャンプ初日の出来事だ。

デイサービスセンター。いざその建物を目の前にすると、手に汗がにじんできた。どんなことをするのか、何もかも分からないまま、私はその建物に足を踏み入れた。

コンコンと扉をノックしたその向こう側には、私の知らない世界が広がっていた。輪投げをするおじいさん、歌を歌ったり、お話をしているおばあさん。多くの利用者様がいた。その中で、私に笑顔を向けてくれた1人のおばあさんがいた。Aさんだった。

「おはようございます。私、今日からワークキャンプでお世話になる村上と言います。よろしくお願いします。」

私は、Aさんと目線を合わせるために、しゃがみこみ、挨拶をした。

「よろしくね。そんなところにひざをつけたら、足が汚れちゃうよ。」

Aさんはそう言って、私のために椅子を用意して

くれた。

それからAさんは、ご自身のことについてお話ししてくれた。

「私は京都出身でね、旦那が神戸で仕事をするようになったから、移り住んできたのよ。」という話から始まり、幼少期のお話や、今の生活について語ってくれた。その中でも、Aさんが特に笑顔になって話したのは、旦那様についてのことだった。

「旦那はね、とても立派な人でね、優しくて賢い人なのよ。」

「旦那様とは今も一緒に暮らされてるんですか。」と私が尋ねた。するとAさんは、一瞬悲しい目になった。

「旦那は今、がんで入院しているの。」

私は言葉を失ってしまった。

「でもね、私がいに行くといつもニコニコしてくれるの。本当は病院で出されたものしか食べたらダメなんだけど、私がこっそりお菓子を持っていくと、嬉しそうに頬張るの。」

Aさんの目には少し涙があった。

「旦那様のこと、お好きなんですね。」

私が語りかけると、Aさんは

「好きですよ。」

と言った。その目の奥には、まるで旦那様がいるようだった。心の底から湧き出してくる愛情。私は胸がいっぱいになった。

デイサービスを利用している方々は、都会に1人で住んでいるという人が多かった。利用者様の多くは、普段の生活に寂しさを感じていた。しかし、デイサービスを利用することにより、他の利用者様や職員の方々とお話しすることができ、笑顔が生まれていた。Aさんは

「ここに来ると、嫌なことも全て忘れて楽しめるのよ。」

と微笑んでいた。

デイサービスを利用する理由は、人それぞれだと思う。その中で、私が感じた、デイサービスがなくてはならない理由、それは「人の心を潤す場

所だから」なんだと思う。利用者様のたくさんの笑顔を見ていると、そう思ってきたのだ。しかし、心が潤されているのは、利用者様だけではないと私は思う。それは職員さんもだ。利用者様の事を思いやり、行動する。その思いやりが利用者様の心に届き、利用者様が職員さんに「ありがとう」とお礼を言う場面がたくさんあった。お礼を言われた職員さんは、みんな笑顔になっていた。その姿は、とても美しかった。そして、その笑顔の奥で、心が潤っているのが分かったのだ。利用者様も職員さんも、そして私も。人と接することによって、孤独でかわいた心に潤いがもたらされる。その場所こそが、デイサービスなのだ。

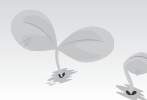
「好きですよ。」

そのAさんの言葉に、笑顔に、潤いを得た私がいた。

佳作作品

高校生の部

再会と感動



神戸市立須磨翔風高等学校

3年 松下 奈澄

「すごい、初めてよ。」

この先生の言葉が3日間のワークキャンプの中で最も印象に残っている言葉だ。3日間という短い時間の中で、私はこの言葉を2回も聞くことができた。

今回ご縁がありお世話になった認定こども園。私が高校1年生の夏にワークキャンプでお世話になった施設で実に2年ぶりの訪問であった。そのお陰か、変に緊張しすぎることなく無事、3日間を終えることができた。ありがたい事に0歳から5歳までの預かっている子どもたち全員と関わることができた。認定こども園とは、保育園と幼稚園の両方の良さを合わせ持っているのが特徴であり、幅広い年齢の子どもたちが同じ施設で過ごすことで、異年齢での交流や社会性が身につくというメリットがあることを知った上でワークキャン

プに参加したが、その良さやメリットをとて身近で感じることができた。年上のお姉さんお兄さんが年下の子どもたちに話しかけに行ったり、トイレでサポートしてあげていたり認定こども園だからこそ見ることができる場面に遭遇し、本当に心優しい子どもたちが多いなと感じた。

毎日違う年齢の子どもたちと過ごす中で、認定こども園で先生として働く方のすごさを感じる場面が何度もあった。3～5歳という1つのクラスでも、それぞれの年齢に合わせた話し方や褒め方、注意の仕方があることに気付いた。でも実際、自分が子どもたちに話しかけると、難しい単語をどうやって伝えたらいいかわからなかったり、注意しても上手く伝わらなかったりと、普段ではめったにない光景に動揺した。そしてその度に、先生のすごさを感じた。

そして、先生のすごさを特に感じたのが、0歳クラス担当の日だった。0歳を預かることは難しいと思っていた。そして、担当の日には想像以上に大変なことが待っていた。言葉が通じず、思いも伝え合うことが出来ない中で、先生に子どもと関わる上での注意をきくと、さらに不安になった。子どもたちが伝えてくる「ああ。」というメッセージを必死に理解しようと努力した。子どもたちの気持ちを全て理解することは難しかったけれど、それを難しいと感じさせる素振りなく子どもたちと関わっている先生の姿が、すごく輝いて見えた。

最初はお互いに緊張していて、ひしひしと子どもたちから緊張が伝わってきたが、一緒に遊んだり着替えの手伝いをしたり、昼寝の時間を一緒に過ごすことで、自然と緊張もなくなり本当に楽しい時間を過ごすことが出来た。

退所時間になり先生方へ挨拶をしていると、小さな女の子が近づいてきているのに気付いた。その日担当だった0歳クラスの女の子だった。最初は緊張していて遊ぼうと近づいても泣いてしまったり、抱っこしても表情がこわばっていた女の子が必死でこちらに歩いてきていた。

「すごい。初めてよ。」

この女の子が誰かに向かって「さよならしたくない、まだ遊びたい。」という思いで泣きながら歩いたのが初めてだったらしい。その瞬間、1日の疲れが吹き飛ぶ感覚を感じたと共に、保育士の仕事の一番嬉しい気持ちになれる瞬間を味わうことができたと思った。

さらに、別の0歳の男の子が掴まり立ちしかできなかったのに、1歩ずつゆっくりと何も掴まず歩いてくるのを見て私は思わず涙がでてしまった。

「すごい。この子も初めてよ。」

私はこの言葉で一気に幸せな気持ちになった。保育士という仕事は楽なものではなく、毎日やらなくてはいけない事がたくさんあり、ワークキャンプを通して改めて仕事に対するプロ意識の高さや保育士という仕事が本当に大好きでされているんだと感じた。

今回のワークキャンプでは、普段の生活では感じる機会のない幸せや喜び、苦しさを感じることができた。そして、保育士の魅力を最大に感じることもできた。



心の輪を広げる体験作文

応募作品数

小学生の部	10点
中学生の部	31点
高校生・一般の部	9点
合計	50点

最優秀賞

【小学生の部】

おじさんともうどう犬 神戸市立長坂小学校 3年 後藤 季空………… 35

【中学生の部】

母の耳の話 神戸市立有野中学校 3年 久松 凜人………… 35

【高校生・一般の部】

障害ってなんだろう 兵庫県立神戸甲北高等学校 3年 藤川ひなの………… 36

優秀賞

【小学生の部】

スター！かしわもちかずと進め！私の未来 愛徳学園小学校 6年 田淵 聖依………… 38

【中学生の部】

弟がいる暮らし 神戸市立湊翔楠中学校 3年 竹下 聖夏………… 39

【高校生・一般の部】

障害という壁 兵庫県立神戸甲北高等学校 2年 朽尾 陽向………… 40

佳作

【小学生の部】

だれでもくらしやすい町 神戸市立雲中小学校 5年 諫山 碧唯………… 41
妹と、もっとおしゃべりがしたい 神戸市立御影小学校 4年 瀬崎 優心………… 41

【中学生の部】

お互いの『理解』 神戸市立本庄中学校 3年 谷本 南………… 42
支えてくれる人たち 神戸市立湊翔楠中学校 3年 牧野 優生………… 43

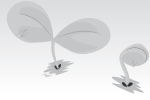
【高校生・一般の部】

変わる見方 兵庫県立神戸甲北高等学校 2年 砂泊 光………… 44
みんなでの一つの輪 兵庫県立神戸甲北高等学校 3年 山崎 愛結………… 45

最優秀賞作品

小学生の部

おじさんともうどう犬



神戸市立長坂小学校

3年 後藤 季空

わたしのおばあちゃんのお兄さんは、目が見えません。今は、八十さいぐらいですが、四十さいぐらいからもうどう犬とくらしています。もうどう犬としてはたけけるのは八年ぐらいなので何びきものもうどう犬とくらしてきました。

おじさんは、東京からわたしのすんでいる神戸までもうどう犬と一しょに一人で来ます。両目とも見えず、まっくらの中、新かん線やタクシーにのります。目が見えないとはどういうことなんだろうと思い、目をつむってみました。何も見えなくて何かにぶつかりそうで家の中でもこわいです。でも、光は感じることは出来ます。おじさんは、光も感じられずまっくらです。それでもおじさんは「目が見えないだけでそれい外はほかの人と一しょだよ。」と言います。どうしたらそんなふうに思えるのかわたしにはぜんぜんわかりません。もし、わたしの目が見えなくなったらかなしくて毎日泣いて外に出ようとは思えません。知らないだけでおじさんもそう思っていたのかな…と思います。

おじさんは、色んなところに友だちがいます。日本中のあちらこちらにもうどう犬と出かけて行くので色んな話をしてくれます。テレビやえい画で見るいい話ばかりではありません。ごはんを食べるお店でも「犬は入れません。」と何回もことわられたことがあるそうです。わたしのお母さんは、おじさんと「もうどう犬きょう会にきふをします。」という、箱が車内においてあるタクシーだったのにおりるとき「犬の毛やよだれとか落としてへんやろなあ。」と言われてお母さんはすごくおこってタクシー会社に電話をして「もうどう犬に理かいがあるフリをするのはやめてもらえま

せんか！ぼ金箱をおいているのに運転手さんの言動はおかしいとちやいますか！」と言って電話を切ると、おじさんは「ありがとうね。そんなおこってくれて。でもこんなことはしょつ中あるんだよ。ハハハ。」と笑っていたそうです。世の中には、犬がきらいな人もいるし、においもするし毛が落ちるのも事実だけど、もうどう犬に理かいをしているフリをしていることにお母さんははらが立ったそうです。目の見えない人だけじゃなく、体の不自由な人がこまっていそうなときは「何かお手つだいできることはありますか？」と言いなさいとお母さんは言います。わたしの高校生のお兄ちゃんは「地下鉄で車イスの人がおりるとき手つだったらまわりの人にはく手されたわ。」と言うと「はく手するくらいやったらみんな手つだてあげたらええやん。」とまたちょっとおこっていました。

わたしも、もう少し大きくなったら、はずかしがらずこまった人に声をかけられるようになりたいです。

最優秀賞作品

中学生の部

母の耳の話



神戸市立有野中学校

3年 久松 凜人

私の母は片耳が不自由です。左耳は普通に聞こえるのですが、右耳はまったく聞こえません。ある病気が原因で、完全に聴力を失ったまま現在に至っています。完治させる技術がまだない難病なので、聴力が回復する見込みはありません。

片耳の難聴の特徴は、両耳とも全聾の場合とは異なり、見た目にはわからないということです。聾のため、補聴器は役に立たない上、もう片方の耳は聞こえるので、手話の必要もなく、一見すると普通に会話をこなしているように見えるのです。そのため、これは「目に見えない障害」とい

うことが言えるでしょう。

片耳しか聞こえないということが、どれほど不便なことかは、そういう状況に置かれてみないとわかりません。母にどういった点が不便なのか尋ねると、次のような応えが返ってきました。

静かな場所や一对一の会話なら、普通にコミュニケーションが取れるが、①騒がしい場所や集団での会話が聞き取れない、②音の方向感がわからなくなる、③聞き返しが多くなり相手に嫌な印象を与える、④右後方から話しかけられても気づかないので、無視しているように思われる、⑤集中して話を聞くので精神的に疲れやすくなる。こういった問題があるそうです。両耳で聞くのと、片耳しか聞こえないということは、かなり状況が異なっていることがわかります。

しかし、母はまるでそういう苦労や不便さなどまったくないかのように過ごしています。私も母の病気のことを普段はまったく意識していません。母が友人たちと会話しているときでも、本当に難聴なのだろうかと思いたくなるほどです。そのため、私もついつい母の耳の問題を忘れ、話しかけても応えてくれないことにいらいらしたり、何度も聞き返されたりすると、いい加減うんざりして「もういい」と突き放したりすることがあります。あとで私のとった態度を思い返すと、「しまった」という思いになります。

もし、母の耳のことをいつも意識していれば、そういう態度には出なかったと思います。母が普通にしているのは、耳のことで子どもに心配をかけたくないという思いがあるからだわかっているのに。私は、母のそういう気遣いに気を回すべきでした。

障害のある人々と共に生きていく社会に必要なことは、このように、障害を持った人々がどんな思いをしているのか、何を心配しているのか、何に気を使っているのかということに「気を回すこと」だと思います。別の言い方をすると「想像すること」です。想像は大切です。もし、私が母の不自由さを、そして私に心配をかけたくないとい

う母の思いを想像していたら、「もういい」と言葉を閉ざすのではなく、別のもっとよい言葉がかけられたと思います。

母にどうしてももうとうれしいか尋ねると、そっと左側に来てもらったとき、心がジーンと温かくなるくらいうれしいということでした。

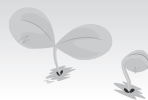
障害のある人々と健常者が明るく共生する社会の実現のためには、私たち健常者の「想像力」が、最も重要だと私は考えます。

最後になりましたが、なかなか人に気づいてもらえない不自由と苦労を背負いつつも、元気な声と太陽のような笑顔を絶やさず、私に精一杯の愛情を注いでくれている母をととても誇りに思っています。母さん、ありがとう。

最優秀賞作品

高校生・一般の部

障害ってなんだろう



兵庫県立神戸甲北高等学校

3年 藤川ひなの

私は、高校の部活動でボランティア委員会に所属していました。平日には、手話と点字を、そして休日にはお祭りのボランティア、児童館での手話講座、障がい者の方々との交流を行っています。私がこのボランティア委員会に入ろうと思ったきっかけは、小学生の時に、授業で点字に触れ、実際に自分の力で点字を打ったという経験があったからです。その時から、私は点字に興味を持ち、外部へ行き、絵本の文字を点字に直す「点訳」を体験したり、外出先の施設で点字を見つけたらそれに触れたりしていました。また、手話を祖母に教えてもらったことがあったので、手話も学べることに魅力を感じ、ボランティア委員会への所属を決意しました。

手話や点字は、盲者や聾者の方々にとって非常に大切なコミュニケーションの手段、そして命を守る重要な手段の一つなので、少しでも多く身に

付けられるよう努力をしました。それぞれ、週に一回しか行われないので、毎時間大切に、一日三つ以上必ず覚えて帰ることを心がけました。阪神・淡路大震災や東北の地震の際より、少しでも多くの命を救う手助けができるよう、防災手話も学びました。それを、地域の子どもたちにも知っておいて欲しいと思い、児童館へ出向いて手話講座を行いました。これらの経験から、障がい者の方々が住みやすい街を作るためには、障がい者の方々に、私たちの意見に合わせ、私たちと同じような行動をするように求めるのではなく、私たち自身が障がい者に寄り添って何を不自由に感じておられるのかを理解しようと努めることが大切だと思います。また、子ども達に早い時期から、命の重さや大切さ、どんな人でも大切にすることを教え、心の教育を取り入れていくことが大切だと思います。

特別支援学校や地域の小学校へ、お祭りのお手伝いに行った際や、障がい者の方々と交流した際には、少し関わり方が難しいと感じることや、予想外の行動に驚いてしまったことも多々あり、とまどう気持ちがありました。でも、この方にもこの方なりの感性があって、それを素直な気持ちで表現されているだけなのだと理解することができるようになりました。

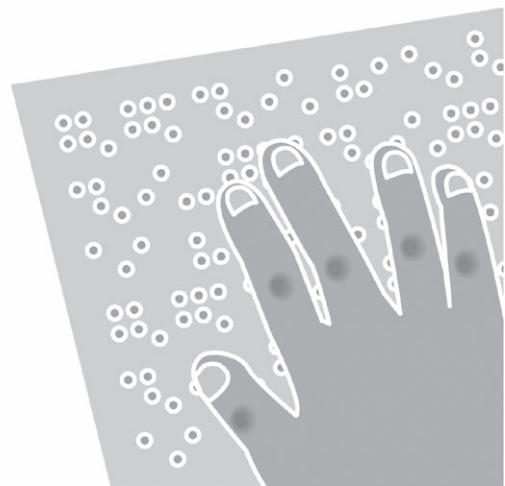
確かに、自分の予想していなかったことをされたり、言われたら恐怖心や嫌悪感を抱いてしまうと思います。しかし、そのような考えが浮かんでしまったときは、障がい者の方の立場が自分や自分にとって大切な人だったらどう接してほしいだろう、どう接するだろうとよく考えてみるようにすれば、より好意的なコミュニケーションの方法や考えを思い付くことができると思います。社会的立場が弱いとされ、特別支援学校を卒業した後の進路に困る人もたくさんおられる中で、自分にできることは何かをよく考えられている障がい者の方々は私は心から尊敬しています。

また、ボランティア実践の授業の一環として、

特別支援学校の生徒と交流する機会がありました。その際に、私は高校一年生の生徒と交流しました。生徒たちはみんな、どの授業も心から楽しんで受けていて、私たちも義務感からではなく、心から楽しんで勉強することを心がけることが大切だと思います。また、どの生徒も恥ずかしがらずに一生懸命発言していて、見習わないといけないと思いました。

これらの経験から、「障害」は持っているとはいけないものでも、弱さでもなく、一つの立派な個性なのだとことを学びました。また、障害は私たちが誰でも自分に対して持っているコンプレックスと同じなのではないかと思います。だから、障害を持っているから弱い、他の人より劣っているという考えを抱いてしまう人が少しでも少なくなればさらに日本は素敵で、優しさの溢れた国になると思います。

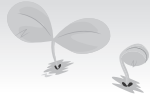
私の夢は、子ども一人一人の個性や長所を伸ばすことのできる保育士になることです。だから、私は今から少しずつでもさらに手話や点字の知識を増やして、障害を持つ子どもたちの心の支えとなるような素敵な保育士になり、日本に貢献したいです。



優秀賞作品

小学生の部

スター!かしわもちかずと進め!私の未来



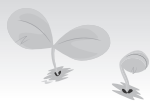
愛徳学園小学校

6年 田渕 聖依

習い事にいつも降りる駅である日、一枚のポスターを見つけました。そこでは、学校の授業のような時間割になっていて午前と午後で合わせて4コマの授業を受けられるようになっていました。私は、母とそのイベントに参加することにしました。福祉がテーマになっている3時間目の授業に選んだクラスは、目の見えないシンガーソングライターの「かしわもちかずと」くんのライブでした。まだ高校1年生だったかしわもちくんは、ギターにハーモニカ、キーボードなど様々な楽器を器用に使って歌います。その姿に私はとてもおどろいて、「本当に見えていないのか…?」と思ったほどでした。彼は、ギターをお琴のようにひざの上にねかせてひき語りをします。ハーモニカを選んでとるときは、すわっているいすの横にポケットのついた布に順番に並べて音楽に合ったハーモニカを用意します。そして、私達の知っている曲でお客さんと一緒に大合唱をして聞いている私達を楽しませてくれます。とても力強くそしてやさしい声の持ち主のかしわもちくん。私と母は、いっしょんで大ファンになってしまいました。その後、兵庫県でイベントがあるたび、母とかしわもちくんの出演するイベントをさがして参加するようになり、かしわもち君も盲学校の高等部三年生になった今年、とても深いメッセージのこもった歌を作って私達に聞かせてくれました。ふだんの日常生活から歌詞を生み出すかしわもちくんは、福祉の講演会で講師としてまねかれた時に、「ぼくには、何も不自由なことはありません。なぜなら、目の見えない人にはそれに合わせた時計があり、五感がなくても四感がとぎすま

れていくからです。」と教えてくれました。その時に歌われた曲は、「伝えたい想い」と言う曲で彼の友達は「目が見えない事が恥ずかしい。目が見えないことを他者に話したとき、色々な人に距離を置かれる気がする…」と目が見えないことをできれば口にしたくないと話したことを歌にしていました。でも彼は、その友達の言葉に対し、「目が見えないことは一つの個性、深く考えることも隠す必要もない。目が見えないかわりにあなたの良いところはたくさんある。」と私達に語ってくれました。それを聞いて私は深く考えました。私もかしわもちくんを初めて見たときは、見えない生活は不自由であれもこれもできない…と勝手に決めつけて、世界はせまいんだろうと思っていました。でも、何度も彼の歌を聞き彼の話をすることでこれが、かたよった見かたをしていることに気がつきました。なぜならその証こに彼はたくさんの人を大好きなギターで笑顔にしています。世界には、色々な人がいて、母が私に「人は、どんな立派な人でも一人では生きられないよ。社会は人と人が助け合って生きているからね。」と教えてくれました。かしわもちくんの歌詞から学んだことは、点字ブロックの上で立ち話や自転車止めると目のかわりに使う白いつえのじゃまになることや世界の発展で車が静かに走る電気自動車は、目の見えない人にとって音で危険が判断しにくくなっているそうです。その中で、助け合って生きていく方法は、目の前に苦しんでいる人や困っている人に手を差し伸べる勇気を持つことと積極的に関わりを持つことで私も実際に電車やバスで席をゆずるなど自らすすんで行いたいと思います。一人一人の思いやりという一本の手を差し伸べる事によって多くの人の助けや救いになるのならば、私達は明日の未来へ希望をもってそれらをめぐみに変えられることをシンガーソングライターのかしわもちくんから学びました。ゆけ!未来を支える私たち。たくさん

の希望という種をこの土地にまいて、助け合い
や人との交わりをつないで豊かな社会に幸せの
花がたくさん咲きつづけますように、今日もC
Dからやさしい歌声がきこえてきます。

優秀賞作品**中学生の部****弟がいる暮らし**

神戸市立湊翔楠中学校

3年 竹下 聖夏

「ダウン症の弟がいます。」

こう言われると、皆さんはどう感じ、どう答えますか？この例に限らず、障がいがある人が家族にいたとしたら、きっと大変そう、と思うのではないのでしょうか。

私の弟は、私が小学五年生のときに生まれました。幸い出産に立ち会うことができましたが、弱々しい泣き声やぼうっとした様子から、母は何か違うものを感じたそうです。それから数日後、弟はダウン症だと告げられました。弟が家に来て数か月間はなかなか体重が増えず、療育やリハビリでてんてこ舞いな日々が続きました。体重が増えてきた後には動き方が不自然だったり、風邪をこじらせてしまって入院したり、無事に保育園が見つかって入園した今も療育やリハビリを続けています。

これだけあげてみると、とても多忙な毎日を送っているように見えるかもしれません。しかし、実はそうでもありません。むしろ、毎日が初めてのことだらけで、とても楽しい日々を過ごしています。私には三歳下の妹もいますが、彼女が生まれたときや赤ちゃんだった頃の記憶が全く無く、ましてや日常的に赤ちゃんに触れ合う機会も無いので、抱っここの姿勢から全てが初めての経験でした。母の話を聞いたり、育児の専門書を読んだりしましたが、時間は普通の人以上の倍以上かかっていますが、お世話の仕方や成長の過程は全くといっていいほど変わりません。ですから、私にとっては

人の成長をじっくり、ゆっくり学べる良い経験になりました。

弟が生まれる前の私は、ダウン症について全然知識が無く、偏見すら持っていたように思います。でも弟のおかげで、様々な境遇にいらっしゃる方々と交流して話を聞く機会を得ることができ、また、私自身福祉について興味が湧きました。弟もダウン症特有の顔付きをしていて、誰が誰か区別がつかないかもしれません。それでも、姉バカが発動してしまうのか、それを変に思ったことはなく、妹と共に可愛がっています。

私の弟はダウン症でも中度で、他に交流した方々の中にはもっと重い障がいを抱えていらっしゃる人もいました。きつともっと大変で辛い思いをされたと思いますが、何よりも感じるのは子どもへの愛情です。愛情があるからこそ、どんなに辛くて苦しいことでも乗り越えられるのでしょう。もし、障がいのある家族がいるとそれだけで何か大変そうと思うのなら、それは少しの誤解です。もしかしたらそう思う人もいるかもしれませんが、大半はその家族に対して愛情を注いでいるはずです。

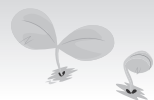
私は、今の社会には交流の場がもっと必要だと考えます。実際に見て、触れて、感じることで、きっと新たな発見があります。そうしてお互いのことを分かり合うことで、共生社会はできると思います。これからも弟の道を応援しつつ、理解を深めていきたいです。



優秀賞作品

高校生・一般の部

障害という壁



兵庫県立神戸甲北高等学校

2年 朽尾 陽向

「ヘルプマークの意味を知ってほしい。」

「白杖ＳＯＳシグナルを知ってほしい。」

最近そういった投稿をよく見ます。私が見た投稿では、ヘルプマークをつけた少年が優先座席に座っていると男性から「そこは優先座席だ。」と叱られていたという内容でした。その男性に限らず多くの人がヘルプマークの存在を知らないというのが正直なところだと思います。私自身もヘルプマークを知ったきっかけはその投稿でした。

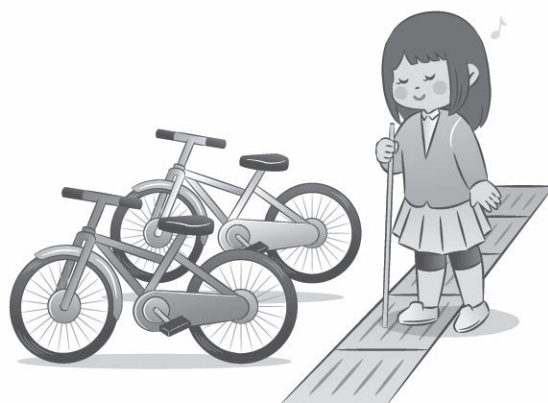
私が通う高校の隣には支援学校があります。私が高校に上がってすぐの頃に一度だけ同じ小学校で支援学級だった子と電車で会いました。久しぶりの再会で、すっかり忘れられているだろうと思ったけれど「久しぶり。」と言ってくれました。私はその子と同じクラスになることが多く、面倒見も良い方だったので、席が隣なことも多々ありました。すると自然と会話する機会も増え思ったことがあります。それは「この子はどうして支援学級なのだろう。」です。身体的な障害がある子ではなく、癇癪を起こしている姿を見たことがなかったもので、私とその子でなにが違うのか分かりませんでした。そして、電車で再会した日、その子はヘルプマークをつけていました。その子を一目みて障害者だと分かる人は少ないと思います。そのためのヘルプマークだと思いますが、そのヘルプマークが知られていないので何も悪くない障害者が無知な一般人によって困ることが多くあります。

白杖のＳＯＳシグナルも点字ブロックの上に物が置いてあり、ＳＯＳシグナルを知っていた投稿者の方が困っていた障害者の方を助けていました。ＳＯＳシグナルを知らず助けられる人もいな

い、そもそも「点字ブロックをとろう。」という声もあるそうです。ヘルプマークの事を調べる時も検索候補の二番目に「ヘルプマークむかつく」とありました。私はそれにとっても驚きました。障害者の気持ちを一切考えない自分勝手な冷たい発言があるということに落胆しました。社会的に障害がある人となない人の間に壁があるような気がします。

私は、障害者に対して寄り添える人になりたいと思っています。理由は二つあります。一つは、将来の夢が看護師になることだからです。もう一つは、「障害がないことがそこまで偉いことか。」と思うからです。もちろんないに越したことはないとは思いますが、しかし、障害がないと必ず法を破らないとは決して言えません。その逆も然りだと思います。高校に上がり、看護や福祉の勉強をする内にその気持ちも強くなったと思います。

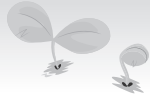
障害者に関するマークの知名度を上げることは、難しいことではないと思います。ただ、知名度を上げるためには、国民が壁をなくす意識を持つことが必要不可欠であると思います。障害がある人が障害がない人と何も変わらない生活ができるように私たちが何をできるか考え直すべきだと思います。



佳作作品

小学生の部

だれでもくらしやすい町



神戸市立雲中小学校

5年 諫山 碧唯

わたしは、最近、しょうがい者でもくらしやすい町について考えるようになりました。夏休み、ある出来事が心に残ったからです。その出来事は、三つあります。

一つ目は、車いすの人が、神でんのぞうきんがけをしていたことです。わたしは、夏休みに、友達にさそわれて、廻廊ひのきしんという、神でんのぞうきんがけをしていました。そのとき、わたしが、たまたま後ろを向いてみたら、車いすの人がぞうきんがけをしていました。ゆかをふくことはできないけど、かべや手すりなどをふいていました。角を曲がる時は、たいへんそうだなと思っていたけど、楽しそうでした。たとえ、車いすを使っている人と同じようなことをしようとしているすがたに、感動しました。

二つ目の出来事は、ひのきしんがおわって、近くの公園のようなところでしょうがいのある人と話をしたことです。わたしは、友達といっしょに、二人乗りロープウェイに乗る所に行きました。そこに行ったら、ボランティアの人が立っていました。そのボランティアの人は、足が短く、しょうがいのある人でした。その人は、わたしたちに話しかけてくれました。まず、わたしが思ったことは、しょうがいがあるのに、元気にボランティア活動をしてすごいなと思いました。そして、わたしや友達、公園に来ている人のためにボランティアをしてくれていたの、かんしゃしたいと思いました。

三つ目は、家族で遊園地に行ったことです。遊園地では、車いすの人を一、二人見かけました。そして、周りの人は、車いすの人がすごしやすい

ように、道をあけて歩いて、じゃまにならないようにしていました。また、遊園地の中のつくりも、だれもが楽しめるような工夫がありました。例えば、遊園地の中にある店の前にスロープがあって、車いすの人でも店に入りやすく工夫されていました。

わたしは、この夏休みに体験したことで、まず、しょうがいのある人と無い人でも、差別をせずに接することができたらいいなと思いました。そして、しょうがいのある人と無い人で協力して、だれもがくらしやすい町をつくっていきたいです。

佳作作品

小学生の部

妹と、もっとおしゃべりがしたい



神戸市立御影小学校

4年 瀬崎 優心

わたしには発達しょう害の妹がいます。妹は、とてもかわいくて、いつもえ顔ですが、おしゃべりが下手で、いやなことがあると大声で泣き出してしまいます。

そんな妹とずっとおしゃべりがしたいと思ったので、青陽東ようご学校の夏期集中こうざに妹やお母さんと参加しました。

わたしは、発達しょう害の子だけが行くようご学校とわたしが通っているみかげ小学校とはたくさんちがいがいることに気づきました。

例えば、ひじょう口が大きくて見えやすいところや、人がならびやすいようにならぶ場所をテープでひいていたり、トイレのじゃ口は発達だんかい別に使えるように、おす・ひねる・まわすの3しゅ類があり、時計のひょうじもふつうのひょうじに24じせいのひょうじがシールでわかりやすくつかされているなどの建物のくふうがされていました。

また、わたしは、休み時間になかよし学級によく遊びにいくのですが、そのときいっしょに遊ん

でいる子たちとちがう特せいをもっている子がたくさんいました。

青陽東ようご学校に行くまでは、発達しょう害の子たちがわがまを言って、先生におこられてばかりいる暗くて楽しくなくて、イヤな場所だと思いました。でも実は、その反対で、その子たち一人一人にあわせて、その子たちが、一番楽しいと思うことをやりながら、できることをふやしていたので、その子たちはずっとえがおで先生たちも、ほめ言葉とえがおであふれている明るくて、楽しい場所でした。

じっさいに行くと思っているのとちがうから、青陽東ようご学校に行くことはできなくても、先生のきょかをもらって、なかよし学級に行ったら発達しょうがいの子のこわくてめんどくさいイメージなどもかわると思います。そして、みんながしょう害のある子となかよく生活ができるとわたしは思いました。

青陽東ようご学校に行こうと思ったきっかけだった、妹とおしゃべりをもっと多くできるようになるための方法は、先生の話を聞いてもよく分からなかったけれど、足の力が弱い妹がとても大きくて、わたしでもペダルが重くて、すぐにつかれてしまうほどのさんりんしゃを妹がスイスイこげるようになっていて、わたしはこんなに成長できるすごさをはじめてしりました。自転車と妹とおさん歩できる日が、ようご学校に行く前より近くなっているようでわたしはとてもたのしみです。



佳作作品

中学生の部

お互いの『理解』



神戸市立本庄中学校

3年 谷本 南

私は、「障害のある人」と聞くと、学童に通っていたころのある出来事を思い出します。

小学三年生の時、私より一つ上の学年に障害のある女の子がいました。ある時、何もしていないのに後ろから髪が抜けそうなほど強く引っ張られ、とても怖い思いをしました。先生もそばにいたけれど、「だめよ」と軽く注意するくらいで叱ったり、止めたりしてくれませんでした。

『どうして髪を引っ張られたんだろう？』

『髪が長いから引っ張ったのかな？』

『目が合ったから？』

色々考えてみても、答えは見つかりませんでした。他の子も同じ様に急に叩かれたり、宿題のプリントに落書きをされたりしたこともありましたが、どうしてそういうことをされるのかわからないし、何がきっかけで手を出してくるのかもわからなくて、痛い目にあいitくなかった私はその子から遠ざかるようになりました。その子は自分の気持ちをあまり言葉で伝えることができませんでした。中学生になった今、もしかしたらあの時「一緒に遊ぼう」と言いたかったのかもしれない、私が座っていた場所に座りたくて「どいて」と言いたかったのかもしれないと考えるようになりました。

つい最近、学校から帰る途中でチラシを配っている女の人がありました。その人は、小学生の時に私の髪を引っ張った女の子と同じ顔立ちだったので、「障害のある人なのかな」と感じました。周りを通りかかっていた人達は、はっきりと断ることができずにどうしたら良いのかわからない様に遠まきに見ながら去っていましたが、私は思い切って「ありがとうございます」と受け取ってみました。すると、その人は笑顔で「良いんですか？」

と確かめながらも渡してくれました。人は、「自分とは違う人」と感じると、どう接していいのかわからなくなってしまうのだと思いました。それと同時に、小学生の時の私も同じことをしていたのだと思い少し寂しい気持ちになりました。

障害のある人となない人が気持ち良く一緒に過ごすためには、お互いに『理解』をしあうことが必要だと思います。特別な専門家がいるような施設だけでなく、学童や学校などの地域で接する大人たちが、もっと障害のある人のことを理解した上で周りの子供達に伝えてほしいと思うのです。そして、特別扱いをするのではなく、人が嫌がることをしてはいけないことなどの人と関わる時の一般的なルールやマナーなどを障害のある人にもわかるように伝えて、障害のある人となない人のどちらも我慢しすぎることなく一緒にいられることが、何よりも大切なことだと思うのです。

佳作作品

中学生の部

支えてくれる人たち



神戸市立湊翔楠中学校

3年 牧野 優生

僕は電動車椅子を使って登下校しています。校内では車椅子やエレベーターを使って移動しているほかに、教室では机や椅子に座り替えて授業を受けたりしています。体育の授業では、みんなと同じように体を動かすことはできないけれども授業を見学をしてその内容をレポートに書くかたちで参加をしています。それ以外の授業はみんなと一緒に受けています。けれども、技術や美術などの作業をするのは少し時間がかかりますが先生方に気にかけてもらいながら授業を受けています。ただし限られた教室のスペースの中で車椅子では動きづらいことがあります。例えば、ロッカーの荷物を取りにくいことや、提出物を先生に提出することです。椅子に座っているときは、プリント

を後ろの人に回したりすることも困ります。しかし、自分一人ではできないことも、手助けしてくれる人達がいます。クラスメイトは落としたシャープペンシルをすぐ気づいて拾ってくれたり、困っているときに先生に伝えてくれます。沖縄へ修学旅行に行った際、普段とは違うクラスメイトが同じ民泊のグループになり、やはり僕を助けてくれました。普段よくいる友達でない色々な人々と接することの大切さを感じました。先生方が異なるクラスメイトとも接する機会を作ってくれたおかげだと思いました。こうして、たくさんの手助けをしてもらっていると、何か僕も返したいと思うのですが、自分自身が他の人達のためにできることはそう多くないのです。それでも、自分を支えてくれた人に、いつも忘れずにありがとうと感謝の気持ちを伝えることはできます。具体的には、いつも支えてくれるクラスメイトに授業でわからないところを教えたり、先生の指示で気づいていないことを伝えたりしています。しかしながら人のためにできることがあればと思っていても、なかなか見つかりません。けれども、できることを見つけるように努力しています。

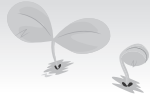
共に支え合って暮らすためには、お互いに感謝をして、自分のできることをいつも支えてくれる人だけではなく、自分自身ができる相手にすることではないかと思うようになりました。お互いにできる人がすることは社会にとっても必要なはずです。

共生社会とは、人と人との助け合いによって成り立ちます。助け合いと大きなことをするだけでなく普段からできる身近にある小さなことを自然にすることが大切です。それぞれの人がそれぞれのいいところを活かすことで、より良い共生社会を作ることができると思います。

佳作作品

高校生・一般の部

変わる見方



兵庫県立神戸甲北高等学校

2年 砂泊 光

私が今までに触れ合ってきた障害者の方は小学校・中学校で出会った特別支援学級の友達でした。

小学生の時は、私自身が白内障という目の病気を抱えており、そのため、人より見えにくく、たくさんの人に迷惑をかけてしまう事が多く、自分自身の事で精一杯になって、特別支援学級の友達にまで気を回すことが出来ませんでした。自分が幼かったから、特別扱いをされていることに対して、心の中で「何であの子だけ…」という思いが多々ありました。だから、私はその友達を当時は好きになれず、自ら関わりを避けてしまっていました。話しかけられても、そっけない対応をしていました。

中学生になっても最初の方は、やはり避けてしまう事がありました。しかし、部活をする教室が特別支援学級の教室だったので、部活が始まる前などは関わる事が多くありました。当時の私は避けていたので、その友達と、どう接するべきなのか分かりませんでした。だから、自分から話しかける事はありませんでした。でも、その友達は明るく私に話しかけてくれました。最初の頃は苦手でしたが、次第に笑顔で話しかけてくれるその友達につられて一緒に笑って遊んだりすることが出来ました。そうして接していく中で、「特別支援といっても私達と同じような感じだな。」と思うようになりました。

高校生になった今、私は看護師を目指しています。そのために、「社会福祉と共生社会」という神戸甲北高校にしかない科目を選択しています。そこでは、障害者や高齢者の方との関わり方について学んでいます。学んでいる中で「安心」や「信頼関係」といった言葉をよく聞きます。それはと

ても大事なことで、安心して私と関わってもらうには、自分から話しかける積極性や、言葉の選択など、たくさん配慮する事が必要でした。今、小学生の時にあんな態度をとってしまった事をすごく後悔しています。今までの私は、自分から積極的に話しかけていくことが出来なくて、後悔や申し訳なさがありましたが、これから先、街の中などで困っている方がいたら、自分の中の勇気をふりしぼって、話しかけていきたいです。

今の社会は障害者差別があると思います。自分とは違う人を嫌い、偏見の目で見てしまう事もあるかもしれません。しかし、それでは「心の輪」は出来ないと思います。障害のある人が障害のない人と同じように生きていけるようにするには、自分自身がどうしたらいいのかを考え、それを言葉ではなく行動で示していくことが大切だと思います。だから私は「話しかけていく。」ということを実践し、障害者の方や高齢者の方が安心して暮らせる街づくりの、小さな一歩にすることができたらと思います。小さな一歩が大きな一歩になるように、これから頑張っていきたいです。またこのような作文を書く機会があれば、もっとたくさんの障害者の方とのエピソードが書けるように毎日を過ごしていきたいと思います。



佳作作品

高校生・一般の部

みんなで一つの輪



兵庫県立神戸甲北高等学校

3年 山崎 愛結

私は、障害のある人とあまり深く関わったことがありません。しかし、車椅子の利用方法を授業で学んだり、視覚障害の体験をしたことがあります。普段車椅子に乗っている方や白杖を持って歩いている方を見ているだけで、どのように感じているかまでは考えていませんでした。でも実際体験してみて、思っていた以上に歩くのが怖かったり周りの目を気にしてしまったり体験しないと分からないこともたくさんありました。最近では、ながらスマホでの事故も多く見られ、それは障害の有無にかかわらず気をつけなければならないことですが、障害のある方にとってはとても怖く感じます。私たちは自分が思う以上に周りを見て行動するべきだと思いました。

ある日、父と出かけ電車に乗っていた時に障害のある方も乗っていました。終電で降りる時、私はその方が大丈夫なのか気にかけていましたが、周りの人もそのまま降りていき、何もできないまままでいた時、父がその方のところへ行き、「大丈夫ですか。手伝いましょうか。」と声をかけていました。父の行動を見て、気にかけていたのにもかかわらず行動にうつせなかった自分の行動力のなさを実感しました。父のその声に、その方は「大丈夫。自分でするから。」と言っていました。もしその方には助けが必要で、誰も声をかけていなかったらどうなっていたのかと考えた時に、心の中で助けたいと思っている人が何人かいたとしても本当に助けない限り意味がないのだと思いました。しかし何でも「手伝えば良い」ということは間違っていると思います。今回の方もそうでしたが、自分でしたい。自立したい。と思っている方も多くいるので、できないから手伝うという考

え、行動が障害がある方は不快に思うかもしれないということを忘れてはいけないと思います。ただただ手伝うのではなく、一度試してみて助けが必要な時に手伝うなど、その方の自立のサポートをするべきだと今回の経験からたくさんのことを考えさせられました。私は授業で障害のある方とのコミュニケーションのとり方について勉強しました。様々なコミュニケーションのとり方がありました。このような授業や車椅子などの体験をしてみて、障害の方の気持ちを知るだけでもその後の行動への意識も変わると思いますし、手伝えることが増えると思います。

今でも障害者差別がされています。なぜ差別が起きるのだろうと不思議です。生まれた時から障害を持っている方もいると思いますが、何らかの事故にまきこまれたり、日常生活でのケガや事故が原因で障害を持つこともあると思います。そのこと一つで周りの態度や接し方が変わったりすることに、どのような理由があるのかと思います。もし自分が事故にあい車椅子生活になった時に周りの人の接し方などが変わったら全員が嫌な気持ちになると思います。相手の立場になって考えると差別などできないと思います。障害がなくても人間は支え合わなければならないことがほとんどです。人に支えてもらっている分以上に自分も誰かを支えたいと思う人がもっと増えればみんなが暮らしやすい環境になると思います。障害のある方に対して、特別という考えをなくし、一人の人間としてみんなが対等に暮らせて、生きられることが本当にあるべきことだと思います。今すぐに差別がなくなることは難しいことかもしれませんが、まずは自分から積極的に障害のある方とのコミュニケーションをとり行動し、見た人が私も、僕も、と少しずつでも広がっていくと良いと思います。前に述べたように様々な体験をしたり講演をしたり直接会って話すなどもっと障害に関して意識や興味を持つ機会を増やすことで心の輪が広がると思います。

今回この作文を書くにあたってさらに障害について考えることができました。心で思っているだけでなく実際に声をかけたり行動できるようにしたいと思います。今後差別がなくなり障害がある人もない人もみんなが良い気持ちで過ごせる世界になれば良いと思います。



「思いやり」「譲り合い」「助け合い」
福祉の心を育む神戸の市民運動

ふれあいのまちKOBE・愛の輪運動



令和元年度

温かい手

編集・発行

社会福祉法人 神戸市社会福祉協議会 地域支援部 広報交流課

神戸市中央区磯上通3丁目1-32

こうべ市民福祉交流センター4F

TEL (078) 271-5306

FAX (078) 271-5366

神戸市 保健福祉局 障害福祉部 障害福祉課

神戸市中央区加納町6丁目5-1

令和元年12月発行 神戸市広報印刷物登録令和元年度第530号（広報印刷物規格A-1類）